

海岸アミ族の協同関係および系譜資料

末 成 道 男

Genealogy and Data for Cooperation in Food Producing Activities among the Coastal Ami, Taiwan

The purpose of this paper is to be a supplement for the book "Social Organization of the Ami in Taiwan" which is printing. The content is composed of three parts.

I. A brief sketch which is focused on the social changes of the village. It is based on a survey made after the fifteen years' interval since the first main research was undertaken. The major findings are: (1) The non-unilinear kinship system is still in existence even though the rule of residence for marriage has changed from uxorilocal into virilocal. (2) Though the age grade system has disappeared in most of the village-wide activities, a remnant of it is still found in the gathering of relatives to assist in house construction.

II. Lists of workers for fishing and farming activities.

III. Genealogies for all of the major kinship groups covering ninety percent of the village population.

はじめに

本稿は、現在印刷中の『台湾アミ族の社会——その志向性』（未成1983）の補篇として、I 15年後の現在みられる変化、II 15年前の生産における協同関係資料、および付録としてその分析に必要な系譜関係資料を提示するものである。

海岸アミ族村落の石溪¹⁾については、本調査を1968年10月～1969年7月、1970年10月に行ない、未成（1971b）にまとめた。それから15年たった本年3月15—30日、9月16—25日再訪し簡単な再調査を試みた。Iはその際気づいたことと、たまたま建築シーズンで協同が行なわれていたのので、15年前と比べどのような変化がみられるのか気づいた点をコメントとして加えながら、5例ほど記した。

IIは、ヒーツェイ漁、稲刈、水田除草、田植についての協同関係のうち15年前に観察しえたものを生の資料に近い形で提示する。このうち前二者については、大部分が未成（1971b、1983）で論じたような、マリニナイ（marinina²ay）、バケ（vake³）、ミトアサイ（mitoQasay²⁾などの関係で説明しうるが、後二者については、個々人がその時点で気の合うものどうし組んで協同し、そのお返しをするといった形でグループが生成、消滅するので、上記の関係のほか、年齢、近隣（住地のほか水田についての）、友人、教派、経営耕地、階層といった諸要素を勘案した分析が必要とならう。

こうした原資料を提示するのは、歴史的記録としてのエスノグラフィーとしての事実の記録をめざす筆者の考え方に基づいている。もちろん、事実は全部を記録することは不可能であるし、観察自体がきわめて限局された一面にすぎないが、従来社会人類学では、モデルと関係のある事実を提

示する特徴を有するものの、主にそれを支持する主要例が説明の手段として挙げられ、諸側面を通じて関係する事例は分析の段階で捨象される傾向があった。年齢階梯制や親族組織などの比較的固定的な原理（これ自体弾力的な運用が可能なことは、末成《1971 b, 1983》で論じた通りであるか）によらない状況での関係形成のあり方を探る上で一見無秩序にみえるこれらの資料も意味をもつ可能性があると考えられる³⁾。これまで、こうした錯綜した資料をそのまま提示しても、それを利用する方法の見当がつかなかったが、最近統計的処理の可能性も出て来たので、それになじむ資料として発表する。

付録は、石溪の14マリニナアイの全個人の系譜を収録した。これには、ミトアサイ関係者も含まれているので、石溪の人々の親族関係を分析する上で、有力な手がかりとなる。事実、今回の再訪に際して持参したが、村人の説明もこれをたどることにより簡単にたしかめられることが少なくなかった。ゴチック体で示したマリニナアイの系譜は、本論でものべるように（66—69頁参照）母系ではないが、これが地元のモデルとなじむものであることは、地元でつくられたガサオの系図と軌を一にしている⁴⁾ ことからいえる。本稿や末成（1983）の事例で、親族関係を具体的に確かめるのに利用しうるであろう⁵⁾。なお、末成（1971 b）においては、末成（1983）の本文でも一部示したような時系列系図を掲載したが、動態的側面分析資料として、別に発表したいと考えている。

I 石溪の15年間における変化

景観の変貌

第1回調査時に比し、今回石溪を訪れて目につくのは、建物がかつての大きさまざまの茅ぶきの木造から、スラブと称される平屋根のコンクリート建てに変っていることである。集会所も同様、コンクリート建てになり平常は鍵がかけられている。かつて夜になるとミハバタイ（たき火の薪を

写真 1 15年前の建築。男ばかりで、少年が屋根の上に、手前の老人は籐削りと年齢層別に仕事の分担が明確に分かれている。



写真 2 1983年の建築。レンガ積みコンクリート建て。右手はエンジンつきセメントミキサー。女性も一人前として参加している。



用意する級)の者が集っていた茅ぶき小屋も集会所付設の幼稚園になっている。前の広場は、やはりコンクリート造りの司令台や観覧席が設けられたため狭くなり、地面はセメントで固められ、夜間スポーツ用の照明施設がつけられた。隣の天主教会は60坪あまりのスラブ建てに改築中であり、下部落のハレルヤ教会も、かつては公路沿いに這うような茅ぶきの草屋であったが、今は上部落へ向う道の傍に二階コンクリート建ての御堂となり十字架が高くそびえている。部落内の道路はすべて舗装され、オートバイを運転しているのに女性が見られるのは以前はなかった現象である。

こうした外見上の変化は、実は社会的な変化とも深くかかわっている。すなわち、集会所を中心とする年齢階梯制の平常の活動の衰退、キリスト教化のいっそうの浸透、それに伴うニヤロ(村)の伝統的結合の弛緩、女性の役割の変化などを反映しているのである。

年齢階梯制とニヤロの結合の弛緩

青年たちが都会や国外へ出嫁ぎに行っているため、かつての年齢階梯制による活動は、収穫祭の時を除きほとんど行なわれていない。そのため除隊後間もない青年のうちには、自分の所属する組名を知らない者さえいる。村人の多くにとって、ニヤロ外部との関係は深まっている。しかし、婚姻を除いて他出先に定住する者は未だ少ない。ニヤロから出て外で働くことをミシヤカイ (misyakay < miする + syakay社会) と称しているように、石溪の人々にとって「社会」はニヤロの外にある別の次元の世界である。中学（現在は中学まで義務教育となっている）を了えるといったんミシヤカイに出る。男子は兵役に就き、除隊後ニヤロに戻ってきて結婚する者が多い。その後も、家庭の事情や外に出て見たいという希望によって40歳台ぐらいまでの間、二年航海と称される遠洋航海や近海漁業、中近東や東南アジアへの労働者として、他出する者も少なくない。

その結果、これまで男子が行なっていた畑や建築関係の重い作業も、女子の手を借りねばならなくなってきた。家屋建築で、単なる下働きとしてだけではなく、レンガ積みや屋根組みに登って作業をしている女性を見かけることも珍しくない。昼食の際かつてのように、男・女別れて座ることもそれほど厳密でなくなり、食事の輪に女子が混るようになっている。

頭目、顧問、役員は、現在社区⁶⁾の理事会と重なる形で温存されているが、かつてのようにビナウラン (vinawran 村の公役) として男子総出で共同作業に集る機会もなくなり、また「かいけつ」の件数も少なくなった⁷⁾。

ロマ（家）の構成

ロマ (romaQ 家) についても、その家屋自体の変貌だけでなく、その中味も変化していることが予想される。今回は上部落のみの、しかも聞取りを主とした調査であるが、その規模や構成を調べてみると表1のようになる。1戸当たり平均では、下部落を含む（したがって規模はいっそう小さ

い) 1969年の7.4人/戸に比べても6.8人/戸と減少している。ただ、その減り具合は、1969年以前に比べそれほど極端ではない。規模でみても表2のように最多数も17人から14人となっている程度である。パロノロマ (paronoma 家族) のタイプも、表3でみられるように拡大型が半減しているのも重要な点であるが、1969年当時に比し夫婦型の割合が減少し直系型が増加しているのが注目される。これは、激増していた分出による新世帯がこの十数年間のうちに3世代にわたるようになり、かつ少なくとも1人の子は結婚後も残る傾向のあることを示している。すなわち、夫婦家族への分解に向わず、むしろ直系家族を志向していると解される。

表 1 石溪上部落の戸口

	1969*	1983
(イ) 人数 (人)	706	635
(ロ) ロマ数 (戸)	96	93
(イ)/(ロ) (人/戸)	7.4	6.8

* 1969の値は下部落を含む、以下同じ。

表 2 石溪上部落のロマ規模

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	計
1969*	1	2	5	6	12	9	19	14	9	7	4	5	1			1	1	96
1983	1	2	2	9	12	15	20	12	9	6	2	1	1	1				93

表 3 ロマのタイプ

	1969*	1983
拡大型	11	5
直系型	34	46
夫婦型	51	42
計	96	93

婚姻の居住様式

婚姻時の居住は、表4、表5のように5年位前までは、半々であったが、

表 4 婚姻の居住様式

	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	計
妻方居住	0	3	4	1	2	0	0	4	0	3	1	0	2	0	20
夫方居住	2	0	1	1	2	1	1	1	4	1	2	4	3	1	24

(注) 年代は、聞取りや子の年齢からの推定による。

表 5 夫方居住婚の変化

	1969 } 1973	1974 } 1978	1979 }
a. 夫方居住婚	6	8	10
b. 婚姻総件数	16	15	13
a/b*100(%)	37.5	53.3	76.9

表 6 現存者婚姻にしめる夫方居住婚(上部落)

	1969	1983
a. 夫方居住婚	27	50
b. 婚姻総件数	117	154
a/b*100(%)	23.0	32.4

最近は夫方居住婚が急増している。もっとも、いずれに住むかは双方の家族の状況(家族構成や財産など)や親や当人の希望によって決められるので、妻方居住婚が全く消失するとは考えられない。しかし、最近の若い世代で、夫方居住婚を望ましい形とみなす傾向はいつそう強まっている。

また、現在生存している既婚者の婚姻について夫方居住婚のしめる割合は、表6のように30%を越している⁸⁾。

さて、このような婚姻時における居住の多様化および夫方居住への傾斜は、筆者が先に提示した石溪の親族組織についての仮説を検証する上で、好都合な状況にあるといえる。

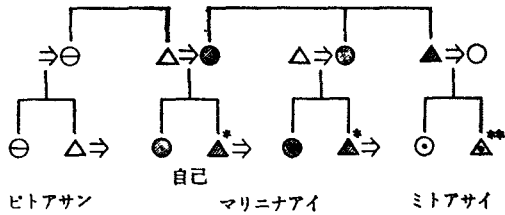
非単系か母系か

仮説とは、石溪における親族集団の帰属が非単系的にきめられ、またバケ、ミトアサイ、ピトアサン(pitoQasan)といった親族関係上の地位・役割も非単系制のもとでの、ロマと個人の関係と解した方が母系制下における母方オジと姉妹の息子の関係と説明するよりも妥当ではないかというものである。

まず、話を簡単にするため図1のように妻方居住婚100%として説明す

凡例	
▲/●	マリナアイ
△/○	ミトアサイ
△/⊖	ピトアサン
*	バケ
**	2代目バケ

図1 親族関係図(妻方居住 100%)



る。自己は、残留者である母親の親族集団マリナアイに所属する(斜線部分、ただし活動面でその婚入配偶者や婚出男子は二重の役割を果しており、いくつかの解釈が可能であるが、この図では単純化して出生集団の帰属のみを問題とする)。このマリナアイの出生男子はバケとして、出生したロマだけでなくマリナアイに強い発言権と超自然的影響力を及ぼす⁹⁾。また、婚出男子の子は、ミトアサイとして ego のマリナアイで歓迎され甘やかされると同時に、作業の時手伝う義務をもつ。また、ミトアサイのうち男子はバケの代理(2代目のバケ)として発言や司祭役を果すこともできる。自己のピトアサンは、婚入者である父親の生家とそのマリナアイということになる。

ここまででは、非単系論をとる筆者と筆者以外の母系論者¹⁰⁾との差はほとんどない(もっとも傍点部分は、後者の立場をとる場合、無意味であるが、前者の立場からは不可欠である)。しかるに、妻方居住婚100%という前提を外すと、その差異が顕著になる。単純化するため、夫方居住婚100%となった場合を考えてみよう。筆者(1971a)の立場からは、居住を基に帰属や関係が決るので、図2のようになる。一方、母系原則のみによって決

図2 非単系論による親族関係仮想図
(夫方居住100%)

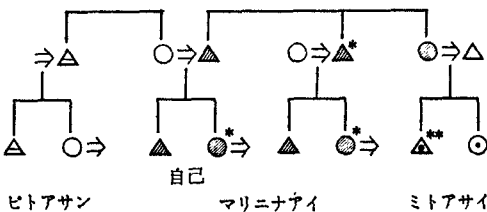


図3 母系論による親族関係仮想図（夫方居住100%）

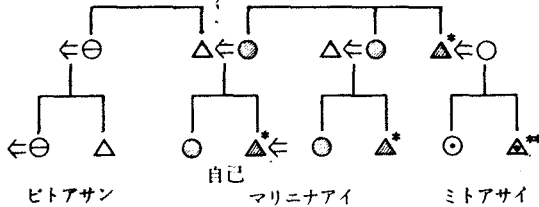
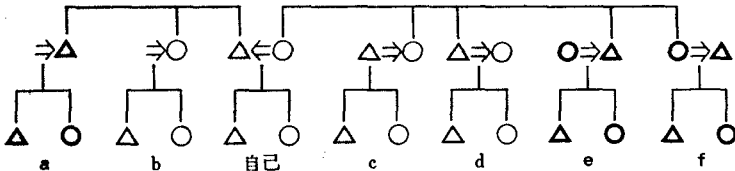


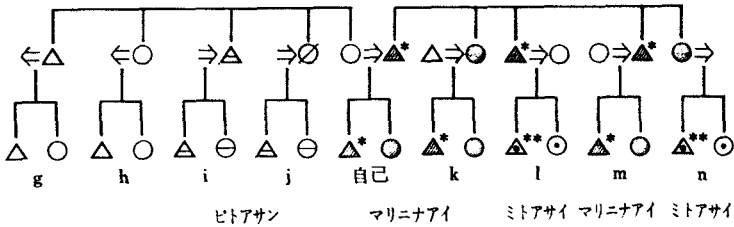
図4 現実の親族関係図—1—（妻方居住，夫方居住混在）



るとすれば、図3のようになるであろう。もちろん、母系制が居住の変化の下にそのままの形で存続するとは考えられず何らかの変化を伴うであろうが、図は夫方居住下の母系集団帰属のあり方の例として示したものである。

さて、現実には、たとえば図4のように妻方居住婚が大勢をしめている中に夫方居住婚が出現するという形で現われている。これからマリナアイ、パケ、ミトアサイなどの関係をどのように設定しうるか、非単系論の場合と母系論の場合で、読者各位試みに記入していただくのも一興であろう。b～dまでは、妻方居住婚であるから、図1と同様になる。問題は、a, e, fで、非単系論ならaはピトアサン、e, fの下の子はそれぞれマリナアイ、ミトアサイになる。母系論では、aは何でもなく、e, fはミトアサイ、マリナアイとなるであろう。ところで、現実に石溪の人人の分類は前者と一致する。この現在の状態を母系論で説明するには、夫方居住の場合は夫のマリナアイに所属して、マリナアイで出生した男子は婚出しなくともパケと言うといった例外規定を設けざるをえないであろう。夫方居住婚が稀であった頃は、このような部分の手直しですむが、例えば図5のようになるともはや、例外規定が主規定に劣らない重要性を

図 5 現実の親族関係—2—(妻方居住, 夫方居住混在)



もってくる。さらに、夫方居住婚の割合が増し100%に近くなった場合父系的構成を示すから、単系論に固執する限り母系から父系へ変化しているという説明も試みられるかも知れないが、この過程と人々の意識との係わりをどう説明するのだろうか。母系と父系という全く異なった原理を、二重単系のように異次元の場でなく、同一の集団構成に状況に応じて使い分けることは多大の困難や摩擦を伴うであろう。そのような過渡的段階を単系的前提のもとに説明しようとすれば、様々の修正付帯条件をつけなければならないが、それらは結局のところ上記のように非単系原理をなぞらざるをえないのである。

現在までの石溪の親族組織が、非単系論の枠組みでもっとも端的にとらえられること、および将来の変化の可能性を考える上での具体的事例として、本年3月に観察した小規模の3例および本年9月に調査したマリナアイBとマリナアイMの二戸の改築例を挙げておきたい。

建築への動員

家の修理・改築は、15年前の1968—1969年当時はビナウランとして青年頭の指揮の下に、ニヤロ（村）の団体出役によって行なわれていたが、現在は「シンセキ」の相互扶助によって労力が調達されている。ムラからシンセキへの変化は、たしかに重要であるが、その扶助の仕方は朝から夕まで毎日長期にわたって加勢するもので、シンセキのうちの青年頭の階梯に近い年齢の者が受入れ側の食事の用意や仕事の段取りを行なったり、夕食

表 7 [17] の放事場かべぬり

(1983. 3. 23)

マリニナイ				婚出者の 配偶者	カダボの 生家など	その他
家方成員	カダボ	婚出者 (バケなど)	ミトアサイ			
17b 42, 17B17	17C 45, 36 d 10				17C45の ピトアサン 39 L 9	17B17の友人 1E16
24B31 24B 5 45b 22	24k 22				ピトアサンの カダボ 40 J 42 36 d 10の兄 36D14	
マリニナイ Bにバラタバ ン 43 Y 33の妻						
マリニナイ Bの42B61の 継父の孫 16D14						
6	4				3	1

(注) 人名記号は、世帯番号・マリニナイ・年齢(1969年当時)を表わす。たとえば17b 42は、世帯[17]のマリニナイb(小文字は女性)で、1969年当時36歳であったことを示す。

表 8 [31] の庭の石垣積み

(1983. 3. 19)

マリニナイ				婚出者の 配偶者	カダボの 生家など	その他
家方成員	カダボ	婚出者	ミトアサイ			
31 i 25 31 I 6	(31 J 34出嫁ぎ のため不在)				40 J 42	隣および ガサオ 37 Y 40
	8 J 53	24 I 43 25 I 40	3K39 19H21 73 I 45	31 i 25の姉夫 20K43		
68 I 30 70 i 42 70 i 11	70 B 45 70 Z 43					
5	3	2	3	1	1	1

後演説するなど、かつての雰囲気を残している。

表 7, 8は、小規模の動員でとくに前者は棟上げやスラブ屋根ふきなどを了えて、仕上げの段階なので参加者も網羅的ではないが、マリニナイ

は、直接の本支関係のある〔45〕-〔24〕-〔17〕に限られ、カダボ (kadavo?) のピトアサンから手伝いに来ているのが注目される。後者は、この日仕事をするからと声をかけて集めたので、少人数ながら、どのような範囲の人人が集るかを見るには都合が良い。小規模の動員なのでマリニアイを中心に、婚出者とミトアサイで済ませ、隣家を除き活動ガサオ (未成1971b, 1983参照) に拡大していない。また、15年前には少なかった婚出者の配偶者、カダボの生家などが見られるのは、新しい傾向といえるかも知れない。

表9は、中規模の動員で豚を殺してご馳走をした。ここでもマリニアイAの〔62〕を本とする分派内での協同で、婚出者の配偶者やカダボの生家からの参加者が見られるのとミトアサイを全く動員していないのが特徴である。もっとも、新しい分家〔56〕で〔62〕を頂点とした場合、Ⅲの系譜図を見ると該当するこの派のミトアサイは36a39の子ぐらいという事情によるのかも知れない¹¹⁾。

表9 〔56〕の倉庫スラブ屋根ふき

(1983. 3.20~3.21)

マリニアイ				婚出者の 配偶者	カダボの 生家など	その他
家方成員	カダボ	婚出者	ミトアサイ			
56 a 37	56 Z 38					56Z 38の生家のガサオのミトアサイ 16D14
18A24	18A24の妻 52 z 17			56A17の妻 14 n 10		
18 a 43	18D47	56 A 17		14 n 10の母 14 n 47		
56 a 10	33 C 46			36 a 39の夫 36 D 46		
59 a 36		36 a 39		59 a 12の夫 1 E 16		
59A17		59 a 12				
60A 7				62A15の妻		
62 a 29	62 Y 34	62 A 15				
62A15					72 y 25の兄 2人 (鳥光)	
72 a 55	72 H 59				72 y 25の姉 の子1人 (馬家海)	
72A33	72 Y 25					
72A21						
72A16						
13	7	4		5	3	1

表10, 11は、本建築の大規模な動員例である。筆者が訪れた時期（9月16日－9月25日）は、ちょうど9月初めから4件の改築が併行して進められていた。つまり、天主教会の御堂（60坪）の改築、〔24〕の改築（56坪2階建て）、〔65〕の改築（52坪）が9月1日から始まり、〔24〕の分のみ1階の平屋根をふき終って、一時中断しそれに引き継ぐ形で、〔123〕の改築（32坪）が9月14日から始っていた。このように、ニヤロ全体の仕事の割りふりが

表 10 〔65〕の改築

(1983.9.17~9.24)

マリニナアイ				婚出者の配偶者	カダボの生家など	その他
家方成員	カダボ	婚出者 (バケなど)	ミトアサイ			
65m 36, 65M17	65A 44		12A 39	8 i 23	25 a 35	
65M15, 65M13	71 b 16 (65 M17の妻)		12A 39の妻 33 a 40の夫		63 b 19 64 b 29	
65M 7		65m20	43A 32 44A 20			
65m 20	56A 17 (妻が他部落 でマリニナ アイ)	8M34	44 B 35			
75m10 (他部落でマ リニナアイ 関係)		22M48	44 a 36			
	23 e 34	62 Y 34	47M49 71 b 7			
	47 b 45	84 Y 37	71 b 12		84 g 33	
	84 g 33	65 Y (鳥光)	2代目			
		Y 30 ? (他村か ら移入)	17B 17	Y 30 ? の妻		
		20m11	20A 28			
バカイツバイのガサオ			27A 35の妻			
7 l 27			34 b 29			
14 n 33	14N67	39 L 19	45 b 22	7 Z 3		
14 n 24	14 n 24の夫	40 J 42	67A 26			
38 l 19	41 Y 32	40 L 13				
41 l 23	69 J 60	71 L 57	代数不明			
41 l 57			44 J 43			
48 l 44						
51 l 31						
15	10	13	16	3	3	1

(注) 太字：4日以上手伝った者。

表 11 [123] の改築

(1983. 9. 16~9. 24)

マリニナイ		婚出者の 配偶者		カダボの 生家など	その他
家方成員	カダボ	婚出者 (バケなど)	ミトアサイ		
42 b 40, 42 b 13 42B10, 42B8	42N49		20A28 26A31 26A31の妻 27A35の妻	14 n 33, 14 I 67 14 n 24, 14 n 24の夫 14 n 14	カダボの同父 異母妹 1 e 39 その夫 1H46 その子 1E16
17B17 24B31 42B62	17C45 34Z35 47G49	44B35 70B45 91B56	70 i 18 2代目 20K43 62A15	40L16 44L30 55Z3?	別の同父異母 の娘 30 e 10
24 b 3 45 b 22 63 b 19 64 b 29 71 b 7	63D42 63 b 13の夫 64Y38 71L57 24 k 32	68 b 27	10 a 27 12 f 33(?) 12F23の妻(?) 56 a 37 59 a 15 3代目 3K39 20K13 20 k 15	38 f 19 38 f 46 40 f 23 51 f 31 生家の入りム コの父 70 I 43	カダボの父方 平行イトコ 25 I 40 42 b 40兄の親 友の息子 28 Z 33? 加勢 57 z 26
Bマリニナイへのバラタパン					
5Z 4 5Z 6 5 z 61 82 h 8			20 k 21 56 a 10 66 j 10 29K24の妻 32Y27の妻 4代目 60A 7 <5>のミトアサイ 2 z 41	カダボのピト アサン 4Y37 10C57	
16	10	5	22	0	15
					7

(注) 太字：4日以上手伝いに来た者。

予め計画されず、各自施主の考えによって仕事が始められ進められるので、ニヤロの人々は、どこに手伝いに行くべきか頭を痛める。すなわち、親族関係だけをとっても、マリニナイやその延長としてのガサオや擬制関係のほか、ミトアサイ——ピトアサンあるいは、姻縁関係がこれら出自集団をクロスする形で張りめぐらされているから、しばしば双方につながりを有し、どの紐帯を選ぶかは、かなり微妙な問題である。教会へも、石

溪では比較的眞面目な信者が多いので、全く怠けるわけにはゆかない¹³⁾。したがって、窮余の策として、日を変えたり、家族を分け別々に手伝いに行くようにした例もいくつか見られる¹⁴⁾。これは、人類学者にとっては、好都合なことで、その選択の様子を観察することによって、諸紐帯の重要度といったものを推測することができる。

〔65〕での協同関係をみると、マリニナイMが、小規模であるため、系譜ガサオを同じくする、L、Nの2マリニナイと共に、活動ガサオを形成して、このような場合、相互に助け合う緊密な関係を結んでいることは、表10にも表われている。なお、71L57はマリニナイMに対しては、この活動ガサオの関係にあると共に娘が〔65〕の65M17の妻であることもあって、自分の婚家はマリニナイBに属しているにもかかわらず、〔123〕へは1回顔を出しただけで、連日〔65〕につめかけていた。また、この活動ガサオの場合まとまりが良いので、71L57は〔65〕のバケとしてマリニナイMのバケと同様の発言や関与をしました尊敬を受けている。この例でもミトアサイの数は全体の1/4近くをしめ、2代目ミトアサイ（ミトアサイの子）もかなりの割合になる。ただし、日数からは、マリニナイやガサオのように連日手伝うという者が少ない。また、〔65〕のカダボ（婚入者）65A44の生家〔80〕やそのマリニナイAから、とくに応援に来ていない。これは、〔80〕やその直接の分家が下部落に居て手伝いにくる余裕のないことや65A44が病気がちで、こうした行事の時これまで義務を果していなかったことから、期待通りの人数が集まらないのだと評されていた。

また、観察しえたのは、レンガつみからスラブ屋根ふきまでの8日間のみで、それ以前、とくに多勢の加勢を得て旧屋の取壊しを行なう初日の顔ぶれをみていないので加勢者全員の名はたしかめられないが、表10の人数のほぼ倍程度と推測される。

〔123〕の改築も、基本的には〔65〕の場合と同様、連日つめかけて手伝いの中核をなしているのは狭義のマリニナイである。一方、ミトアサイは4代目にまで及び人数は多いが、連日来ない方が多く、のべ日数にすると比重は小さくなる。

この例のもうひとつの特徴は、カダボである42N49の生家およびそのガサオなどの関係者が多数来ていることである。この点は15年前の同じくマリニナイBの動員においても認められなかった。これは、新しい傾向のほか、42N49が働き者で相手の建築にまめに手伝いに行っていたことと関係があると思われる。その生家が〔14〕で、〔65〕のガサオと同じであるため、またマリニナイBの成員の多くのピトアサンが〔65〕であるため、両所への加勢は競合する者が多かった。

さて、以上の2例において、狭義のマリニナイ、バケ、ミトアサイの区別は明確である。夫方居住婚を行なっている24B31、42B62などは、〔123〕において、婚出男子たとえば70B45と同様バケとしての扱いを受けていた。たとえば、〔123〕の上棟式において、ミサリシン (misarisin 呪術)を行なったのは、24B31であった。15年前の動員リスト(末成1973b)とは、動員日数や契機が異なるので単純な比較はできないが、ミトアサイにその配偶者が代理している例がやや増え、また、とくに〔123〕においてカダボ関係者の応援がかなり多くなっている。これは、あるいは婚入者の親族の比重が、とくに〔123〕のように新しい分家の場合、増加していることを示すものかも知れない。これと関連して、バケというタームを、婚入者の兄弟に対する親族名称として用いるというインフォーマントが以前より増えたように思われる。しかし、これはあくまでも名称上のことで、上記のような発言権や超自然的影響力を伴うものとは考えられていない。婚入者のステータスは、妻方居住婚の場合でも向上していることは事実で、変化の動向を把握する上で重要であるが、少なくとも現在までのところ、末成(1971b, 1983)で描いた枠組を越え、マリニナイとミトアサイの

区別を失なわせるには至っていないといえよう。

年齢階梯制の再現？

〔65〕で、ミスラブ（misuravu スラブ屋根のコンクリートを流し込むこと）の日、恒例によってブタを殺し、これまで手伝った人々を全て呼んで宴会を開いた。この時、バケに所定の部分の肉が配られたのはもちろん、



写真 3 15年前の集会所内での食事。
男子のみが年齢級別に座っている。



写真 4 青年頭 2 級下の組の者が
パカロガイたちを指図し、各組ご
とに飯と汁、おかずを人数分並べ
る（1983年）。



写真 5 建築終了後に、目上の組の
者が 1 級下の組にブタの脂肉のかた
まりを食べさせる（1983年）。



写真 6 女子も近年肉のふるまいに
参加。脂肉を食べさせる行事をまね
して騒いでいる（1983年）。

男女100人近くの食事が、旧慣の年齢階梯制の方式で出された。すなわち、角切りにした肉を水炊きにして、各年齢組ごとに、青年頭の2級下の17B 17が、てきばぎと指図をしながら配ってゆき、ハクハク(hakhak おこわ)と酒で食事をとる。食事の半ばをすぎると、上の組から建築完成の時のきまりとして、15cm×5cm×5cm ぐらいの脂肉を下の組の者に食べさせる行事が行なわれた。これらは、以前ニヤロの行事として行なわれていたのが、親族協同行事においてそのまま採入れられているものである。

なお、新しい試みとして数年前から、女子もこの肉の分配に与ることが認められた。これは、男子が他出し、本来男子のやるような作業も女子が受持っているから、女子にも肉のごちそうの権利があるべきだという発想から、女子もほぼ同様の組分けをし、男子と並んで食事をするにしましたものである。しかしながら、全く年齢階梯的な訓練を受けていないためか、あるいは本性なのか、そのおしゃべりは、男側からの度々の制止にもかかわらず演説の最中もやむことなく、時に張りつめるような緊張感を伴った伝統的年齢階梯制の秩序が全く過去のものとなったことを悟らせるに充分なものであった。

II 生産における協同関係資料（1968—1969年）

a. ヒーツァイ漁における協同

石溪でヒーツァイ（魚仔^{ヒーツァイ}福建語）と称しているのは、虱目^{ミンパク}という鮎に似た海水魚の稚魚で、西部の魚塢（養魚池）で養われる。毎年6月ごろ沿岸の浅いところに押し寄せたものを、泳いだりテッパイ（竹排^{テッパイ}福建語）という直径10cm余りの麻竹を14～15本組合せた竹筏に乗って、すくい取り、買取りに来た本省人に売渡す。魚苗の値が良いため、シーズンになると男たちは争って海岸でヒーツァイ漁に専念するが、テッパイを表12のように数戸共同で使用し儲けを分配することが多い。系譜図を参照して関係をチェックするとわかるが、ほとんどはキョウダイ、イトコぐらいの系譜



写真 7 ヒーツァイ漁テッバイの進水式 (1968年)。

表 12 ヒーツァイ漁のテッバイ協同グループ

戸内

- 1 [43] 43A32 1人
- 2 [20] 20K43, 20A28 (娘の夫)
- 3 [40] 44L30, 44J43 (カダボどうし)

マリナアイのカダボ

- 4 [42] 42B49, 42H49 (カダボ), [63] 63D42 (カダボ)
- 5 [33] 33C46 (カダボ), [43] 43Y36 (カダボ)

マリナアイとバケ

- 6 [24] 24B31, [44] 44B35 (バケ)
- 7 [26] 26A23, [12] 12A39 (バケ)
- 8 [78] 78H59, [1] 1H46 (バケ)
- 9 [13] 13Y44 (カダボ), [13] 72H59 (バケ)
- 10 [7] 7Z42, [7] 56Z38 (バケ)

的距離で、最も遠いのが26A23と12A39の第4イトコである。バケと組む例が半数あり、ミトアサイとの協同がないこと、マリナアイ内の協力が2例と比較的少ないのが注目される。

b. 稲刈における協同

多くは、自家労働力で稲刈りをするが、表13のように若干の協同関係がみられる。ヒーツァイ漁と同様バケまたは、婚出女子の生家と婚家が大多数をしめ、系譜的にも近いマリナアイが3例、友人が1例となっている。



写真 8 稲刈風景 (1968年)。

表 13 稲刈の協同

			関	係			
1	[4]	(14)	[13]	(3)	友人		
2	[7]	(21)	[56]	(7)	バケの生家と婚家		
3	[8]	(11)	[65]	(7)	バケの生家と婚家, 生家当主病気なので応援		
4	[9]	(10-10)	[17]	(6)	バケの生家と婚家		
5	[10]	(12)	[62]	(14)	女子婚出者の生家と婚家		
6	[12]	(38)	[44]	(36)	[67]	(13)	バケの生家と婚家および分家
7	[18]	(6-6)	[72]	(2)	マリニナイ (第一イトコ)		
8	[20]	(12)	[26]	(7-7)	バケの婚家と生家		
9	[24]	(27)	[45]	(10)	[47]	(14)	マリニナイ (姉妹と第一イトコ)
10	[36]	(15)	[59]	(6)	女子婚出者の分家と婚家		
11	[42]	(31)	[63]	(12)	マリニナイ (キョウダイ)		
12	[68]	(11)	[73]	(15)	バケの婚家と生家		

(注) 1. ()内は所有経営耕地面積, 単位アール。

2. ×-×の×は, もと×アール所有していたが, 現在所有せず耕作のみしていることを示す。

c. 水田除草における協同

水稻耕作において, 除草作業も, 田植ほどではないにせよ, 労働交換の顕著な契機である。シーズンごとに, 気の合う者が集って, 弁当持参で手伝い合う。なお, 雇傭労働のみあるいは自家内で行なうところもあるが少ない。表14でみられるように, 主に女性の作業であるが, 男のグループもある。ほぼ, 同年齢層 (男子の場合カブット) が中核をなして、同一

表 14 水田除草グループ

グループ	月 日 (1969年)	
1	2.24	4 y 37, 5 z 36, 36 a 59, 36 a 39, 59 a 36, 72 y 25 (14) (4) (15) (15) (6) (2)
2		16D35, 24B31, 29K24, 32K30, 33 I 27, 42B29, 43 Y 33 (10) (27) (12) (15) (8) (31) (22-22)
3	2.24	7 l 27, 8 i 23, 30 e 23, 31 i 25, 32 y 27, 40 l 36, 70 i 38, (21) (11) (12) (14) (15) (8-8) (20) 73 j 40 (15)
4	2.28	42 b 40, 63 b 38, 34 b 29, 66 y 42 (31) (12) (4) (9) あとから 1 e 39, 12 f 33, 64 b 47 (13) (38) (15)
5	2.28	12 f 31, 27 j 29, 42 y 29, 43 a 29, 44 a 37, 64 b 47 (38) (9) (31) (20-20) (36) (14)
6	3. 1	10 a 27, 16 y 35, 24 k 22, 28 z 18, 29 g 27 (12) (14) (27) (3-3) (12)
7	3. 2	12 f 59, 20 i 38, 22 j 36, 25 d 21, 44 a 30 ^f , 70 i 38, 73 j 40 (38) (12) (5) (20) (36) (20) (15)
8	3. 2	11 c 34, 12 f 32, 47 b 45, 60 a 37, 71 b 52 (14) (38) (14) (8) (21)
9		3K39, 12A39, 14Y40, 15Z36, 21D31, 61Z37, 64B38, (5-5) (38) (14) (6-6) (6) (0) (14) 66 J 38 (9)
10	3.18	2 z 41, 9 c 39, 10 y 53, 18 a 43, 52 y 37, 55 y 31, 54 g 43 (0) (10-10) (12) (6-6) (0) (7) (13)

のロマから別々のグループに参加している場合も多い。

水田面積の大小との相関もとくにないようである。日数で返すので、自分の水田が広い場合は、それだけ多くのところへ手伝いに行くようにしている。なお、水田を耕作していない2 z 41と52 y 37, 61 z 37については雇傭労働なのか、ほかの形での反対給付があるのか調査洩れである。

d. 田植における協同

採集した時も、除草グループの場合と同様一定の分析結果を予想したわけではなく、個別的な要因によるものと思ひ、念のため一定期間水田をまわって記録しておいた。全部を網羅していないのが難点であるが、特定の個人ないしロマをとって、その手伝いにくる範囲といったものから傾向性が

正 誤

「海岸アミ族の協同関係お
よび系譜資料」の表15中、
* は † に訂正。

見出せないかと考えている。なお、水田の面積については、後から聞き取りによって補ったものがあるので、ごく大雑把な数字として参考にしてほしい。

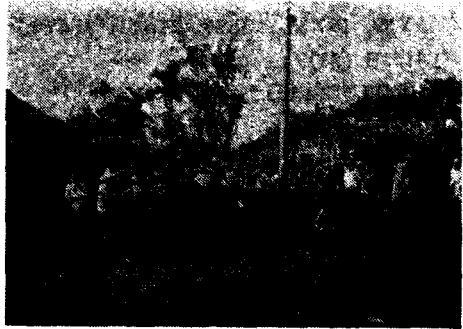


写真 9 田植当日朝、各自思い思いに待ち合せ、水田へ向う (1968年)。

表 15 田植の協同 (1969年)

(凡例) 1. — 苗取 3. 戸内はわかった者だけ最後に記す
2. ~~~ 苗運搬 4. () ミサクリ“賃券”

1月19日 [42] 主に戸内で (Sana, 2ha)
63 b 38, (人夫 6 名—Mořnos のアミス), 42 B 29, 42 Y 29, 42 b 40, 42 N 19
1月24日 [8]
7 z 20, 11 c 21, 41 a 20, 49 j 30, 30 e 23, 65 m 20, 67 a 17
1月25日 [20]
3 y 39, 14 n 37, 68 f 27
1月25日 [31]
8 i 23, 11 c 21, 30 e 23, 33 a 40, 41 a 30, 49 j 30, 70 i 38, 31 i 25
1月26日 [36]
戸内
1月26日 [33]
20 k 21, 25 d 21, 31 i 25, 70 i 42, 33 C 46
1月26日 [1] (Citadomai, 1.2ha)
5 k 48, 7 l 27, 8 i 23, 11 c 21, 17 b 42, 16 y 35, 30 e 23
1月27日 [65] (Paņcah, 0.3ha)
7 z 20, 8 i 23, 11 c 21, 12 f 31, 14 n 37, 26 y 33, 32 y 27, 43 a 29, 44 a 20,
60 a 37, 65 m 20
1月27日 [59]
2 z 41, 25 d 21, 48 l 44, 54 z 43, 59 a 15, 59 a 36, 59 G 41

末成道男

1月27日〔70〕(Sına[?], 1ha)

7 ℓ 27, 20 k 21, 31 i 25, 33 a 40, 44 a 30', 70 i 38, 70 Z 43, 70 i 40, 不明 2人

1月27日〔35〕(Sına[?], 1ha)

(人夫 8名——Mořnos のアミス)

1月27日〔21〕(Teņa[?]an, 0.4ha)

3 y 39, 16 y 35, 17 b 42, 21 d 31, 21 d 68, 21 Y 37

1月27日〔54〕

10 c 19, (2 z 19)

1月27日〔62〕

10 a 27, 10 y 53, 29 g 27, 41 ℓ 23, 78 a 23, 62 a 29, 62 A 17

1月28日〔55〕(Teņa[?]an, 0.6ha)

10 c 19, (2 z 19)

1月28日〔7〕(Paņtsah, 0.8ha/1.8ha)

3 y 39, 8 i 23, 11 c 21, 23 e 34, 28 z 18, 28 z 17, 44 a 20, 65 m 20, 7 ℓ 27, 7 y 42

1月28日〔9〕(Teņa[?]an, 0.5ha)

戸内 4名

1月28日〔25〕(Atiwņan, 0.3ha)

2 z 41, 2 z 19, 14 n 24, 20 A 28, 27 j 29, 32 y 27, 36 a 39, 42 y 29, 43 a 29, 59 a 36, 25 A 21, 25 Y 61

1月28日〔73〕(Paņtsah, 0.9ha)

14 n 37, 17 b 42, 31 i 25, 49 j 30, 63 b 38, 64 b 47, 66 y 42

1月29日〔10〕(Paņtsah, 0.4ha)

28 z 18, 55 z 31, 59 a 36, 62 a 29, 10 a 27, 不明 1人

1月29日〔44〕(Paņtsah, 0.6ha)

7 z 20, 12 f 33, 24 k 22, 31 i 25, 65 m 20, 70 i 38, 80 a 47, 44 B 35, 44 J 43

1月29日〔26〕

3 y 39, 7 ℓ 27, 16 y 35, 21 d 31, 23 e 34, 28 Z 65, 44 a 20, 34 b 29, 42 b 40, 47 b 45, 63 b 38, 26 y 33, 26 A 23

1月29日〔43〕(Atiwņan, 0.6ha)

8 i 23, 11 c 21, 12 f 31, 14 n 24, 17 b 42, 25 d 21, 30 e 23, 42 y 29, 44 a 20, 49 j 30, 63 b 38, 65 m 36, 66 y 42, 43 H s 26 (本省人), 不明 1人

1月30日〔5〕(Paņtsah, 0.2ha)

48 ℓ 44, 52 y 37, 54 z 43, 57 z 26, 5 z 36

1月30日〔14〕(Paņtsah, 1.1ha)

12 f 33, 20 A 28, 22 j 36, 24 k 22, 25 A 21, 29 g 27, 30 e 23, 38 ℓ 19, 42 b 40, 43 H s 26 (本省人), 44 a 30, 45 y 23, 65 m 30, 68 b 27, 69 Y 35, 73 j 40, 14 n 24

- 1月30日〔36〕(Pantsah, 0.5ha)
 25 d 21, 51 ℓ 31, 59 a 36, 62 a 19, 72 A 33
- 1月30日〔41〕(Pantsah, 0.8ha)
 10 a 27, 41 ℓ 23, 不明 2人
- 1月30日〔32〕(Pantsah, 0.6ha)
 20A28, 44 a 30, 60 a 37, 63 b 38, 64 b 29, 32 k 62, 32 Y 27
- 1月30日〔79〕(Pantsah, 0.4ha)
 80 a 47, 83 y 45, 85 y 35, 85 E 37, 86 e 63, 86 H 72
- 1月30日〔28〕(Pantsah, 0.6ha)
 16 y 35, 58 z 18, 28 z 18, 28 Z 24, 28 Z 65
- 1月30日〔11〕(Atiwŋan, 0.6ha)
 7 z 20, 8 i 43, 10 c 19, 31 i 25, 44 a 20
- 1月31日〔30〕(川原, 0.6ha)
 8 i 43, 14 n 33, 23 e 34, 25 A 21, 29 g 27, 31 i 25, 70 i 38, 30 e 23
- 1月31日〔34〕(Pantsah, 0.4ha)
 7 z 20, 26 y 33, 56 Z 38, 63 b 38, 66 y 42, 69 ℓ 27
- 1月31日〔44〕(Pantsah, 1ha)
 12 f 33, 14 n 37, 24 k 22, 25 d 21, 32 k 62, 65 m 36, 67 a 17, 44 B 35, 44 J 43
- 1月31日〔17〕(Teŋaʔan, 0.7ha)
 3 y 39, 7 Z 24, 16 y 35, 28 z 18, 41 ℓ 23, 57 z 26
- 1月31日〔64〕
 12 f 31, 17 b 42, 32 y 27, 42 b 40, 43 a 27, 43 a 29, 64 b 29
- 1月31日〔49〕(Sinaʔ, 0.46 u)
 8 i 23, 25 a 35, 27 j 29, 31 J 34, 69 ℓ 27, 70 i 42, 49 Y 33, 49 C 62
- 2月2日〔32〕27 j 29, 29 g 27, 32 y 27, 65 m 20, 32 k 62, 不明 2人
- 2月2日〔47〕(0.5ha)
 26 y 33, 34 b 29, 60 a 37, 63 b 38, 不明 1人
- 2月2日〔53〕(0.5ha)
 10 y 53, 51 ℓ 34, 57 z 26, 79 g 30, 53 g 45
- 2月2日〔73〕(Pantsah, 1ha)
 12 f 31, 14 n 37, 22 j 36, 25 a 17, 30 e 23, 60 a 37, 65 m 36, 70 i 42,
73 j 40
- 2月2日〔7〕(Pantsah)
 56 Z 38, 69 Y 35, 70 i 38, 7 y 42, 7 ℓ 27, 7 Z 42, 7 Z 32
- 2月2日〔16〕(Pantsah)
 3 y 39, 4 y 37, 20 K 43, 24 K 24, 29 g 27, 不明 1人
- 2月2日〔67〕(Sinaʔ, 0.9ha)
 (2 z 19), 8 i 23, 12 f 33, 18 a 43, 37 y 14, 44 a 30, 44 a 30', 48 ℓ 44, 54 z 31,

末成道男

67 a 17

2月2日〔64〕(1月31日の残り)

42 b 40, 64 b 47

2月3日〔57〕(Pantsah, 0.4ha)

3 y 39, 5K48, 9E43, 10 c 19, 16 y 35, 28 z 18, 29 g 27, 52 y 37, 57 z 26

2月3日〔4〕(Pantsah, 0.5ha)

5 z 36, 10 y 53, 16 y 35, 56 a 37

2月3日〔63〕(Pantsah, 0.5ha)

32 y 27, 43 a 27, 42 b 40, 60 a 37, 65 m 36, 66 y 42, 63 b 38

2月3日〔51〕(Pantsah)

36 a 39, 48 L 21, 48 l 44, 53 g 45, 51 l 31

2月3日〔12〕(Sina?, 1.0ha)

(2 z 41), (2 z 19), 8 i 23, 11 c 21, 14 I 67, 16 D 35, 25 d 21, 30 e 23,
32 k 59, 33 a 40, 43 a 29, 44 a 36, 44 a 30', 64 b 29, 65 m 20, 69 l 27,
12 F 16, 12 f 33

2月3日〔14〕

(3名)

2月5日〔8〕

(2名)

2月5日〔49〕

12 f 31, 22 j 36, 43 a 29, 49 j 30

2月5日〔43〕

14 n 24, 33 I 27, 43 a 29, 43 Y 33, 44 a 36, 不明1人

2月5日〔44〕

12 f 33, 25 a 35, 66 y 42, 44 J 43

2月5日〔10〕

(2 z 41), (2 z 19), 4 y 37, 24 k 22, 28 z 18, 33 a 40, 53 g 45, 56 A 17, 57 z
26, 62 a 29, 72 y 25

2月6日〔42〕(Piyatsun, 0.7ha)

14 n 84, 47 b 45, 64 b 47, 2人不明, (人夫10名——Piyatsun の Tanavılan)

2月6日〔36〕

33 a 20, 48 l 44, 55 z 31, 59 a 36

2月7日〔28〕(Pantsah)

2 z 19, 16 y 35, 18 a 43, 26 y 33, 28 z 18, 44 J 43, 52 y 17, 55 z 31, 不明1人

2月7日〔70〕

7 z 20, 11 c 21, 14 n 24, 20 i 38, 31 i 25, 32 y 27, 44 a 20

2月8日〔18〕(Pantsah)

12 f 33, 41 l 57, 48 l 44, 51 l 34, 52 y 37, 59 a 36

- 2月8日〔51〕 (Paŋsah)
 21 d 31, 41 ℓ 23, 52 z 17, 55 z 31
- 2月8日〔29〕 (Atiwŋan, 0.7ha)
 3 y 39, 30 e 23, 31 i 25, 57 z 26, 62 a 29, 67 a 17, 70 i 38, 29K24, 29g 27
- 2月8日〔16〕 (Matatokon, 0.3ha)
7Z24, 28 z 18, 32 k 59, 56 a 37
- 2月8日〔11〕
 (2 y 43), 4 c 41, 11 c 21, 12 f 32, 17 b 42, 42 y 29, 43 a 29
- 2月9日〔42〕 (Atiwŋan, 0.8ha)
 57 z 26, 72 y 25, (人夫8名—Moŋnosのアミス)
- 2月9日〔45〕 (Kadahan, 0.4ha)
 14 n 37, 34 b 29, 43 a 29, 65m20, 68 b 27, 45B19, 45 y 23
- 2月10日〔47〕 (Atiwŋan)
 12 f 33, 26 y 33, 44 a 30', 66 y 42, 47B18, 47 b 16, 47G49
- 2月10日〔24〕 (Kadahan)
 (人夫14名—Moŋnosのアミス)
- 2月10日〔44〕
 8 i 23, 32 k 59, 32K30, 43 a 29, 45 b 22, 49 j 30, 67 a 17, 67 a 42, 69 y 35,
44 J 43
- 2月11日〔68〕 (0.3ha)
 29 g 27, 43 a 29, 不明1人
- 2月11日〔12〕 (0.3ha/0.7ha)
 27 j 29, 32 y 27, 51 ℓ 34, 52 y 37, 59 a 30', 60 a 37, 66 y 42, 66 J 38, 67 a 17,
 81 g 62
- 2月12日〔67〕
 12 f 31, 29 g 27, 44 a 30, 44 a 36, 53 g 45
- 2月13日〔64〕
 43 a 29, 44 a 30', 47 b 45
-

注

- 1) 仮名である。末成(1983)参照。
- 2) 原語の表記法は末成(1983:8—9)による。
- 3) 明確な傾向性は得られないにせよ、自由度の幅ないし、全くランダムであるといった点が確かめられれば、それはそれとして意味があると考えられる。なお、この前年に、教派ごとに田植グループを組んだと伝えられているので、その影響が現われる可能性はあると思われる。
- 4) 末成(1971b:395—399, 1983:156—177)参照。
- 5) とくに、本稿のように単純化のため協同参加者を表形式で表わしたが、その

- 清水 昭俊 1973, 「家庭イデオロギー批判」『思想の科学』14: 15-36。
- 末成 道男 1971 a, 「台湾海岸アミ族の社会結合——P村における擬制親族の役割——」『東洋文化研究所紀要』55: 9-43。
- 1971 b, 『台湾アミ族の社会組織——変動過程にある一村落の分析——』（東京大学学位論文）826 pp.
- 1975, 「親族」『文化人類学読本』吉田禎吾編, 東京, 東洋経済新報社, pp. 35-80。
- 1976, 「親もとからひき離す——台湾の部族社会にみる年齢階梯制——」『アニマ』46: 32-37。
- 1979 a, 「同族」『仲間』（原忠彦ほかと共著）東京, 弘文堂, pp. 99-252。
- 1979 b, 「台湾の原住民」『世界の民族』13東アジア, 東京, 平凡社, pp. 116-125。
- 1983, (印刷中)『台湾アミ族の社会組織と変化——ムコ入り婚からヨメ入り婚へ——』, 東京, 東京大学出版会。
- 山路 勝彦 1980, 「アミ族の親族と祭祀」『黒潮の民族・文化・言語』東京, 角川書店, pp. 105-149。
- 阮 昌 銳 1964, 「港口阿美調査簡報」『考古人類學刊』23, 24期, pp. 53-66。
- 1969, 『大港口的阿美族』上, 下, 中央研究院民族學研究所。

【付録】 石溪のマリニナイ別系譜資料

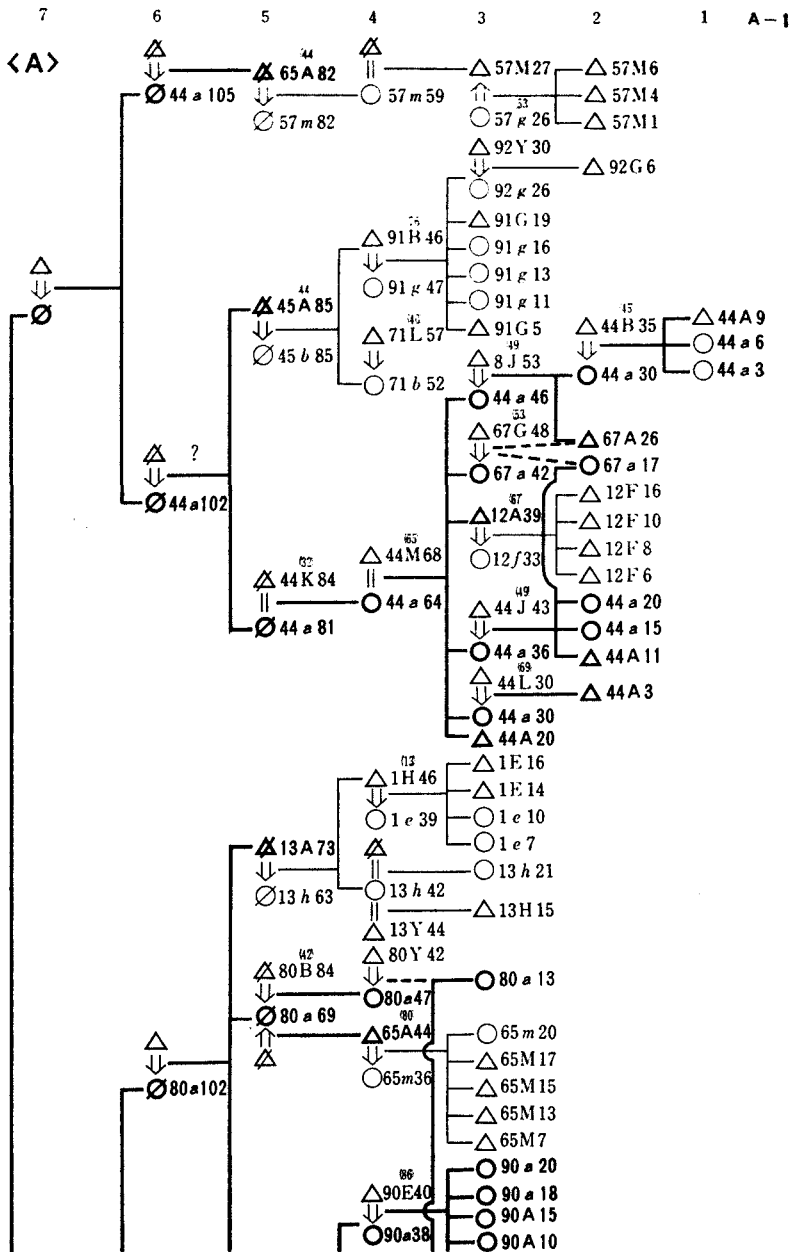
凡 例

人名記号 世帯番号・マリニナイ記号 (大文字は男性, 小文字は女性)・
1968年1月1日年齢

アルファベット上の () は, 生家世帯番号を示す。

ゴジックは, マリニナイ関係を示す。

△: 男	A	—: 実親子関係
	♂: AとBが離婚	
○: 女	B	---: 養親子関係
△, ○: 死亡者	A	
	≡: AとBが婚姻	[: キョウダイ
	B	
A	A	: 上に同じ (再婚
↓: AがBに婚入	B	: 以上の場合)
B		



7

6

5

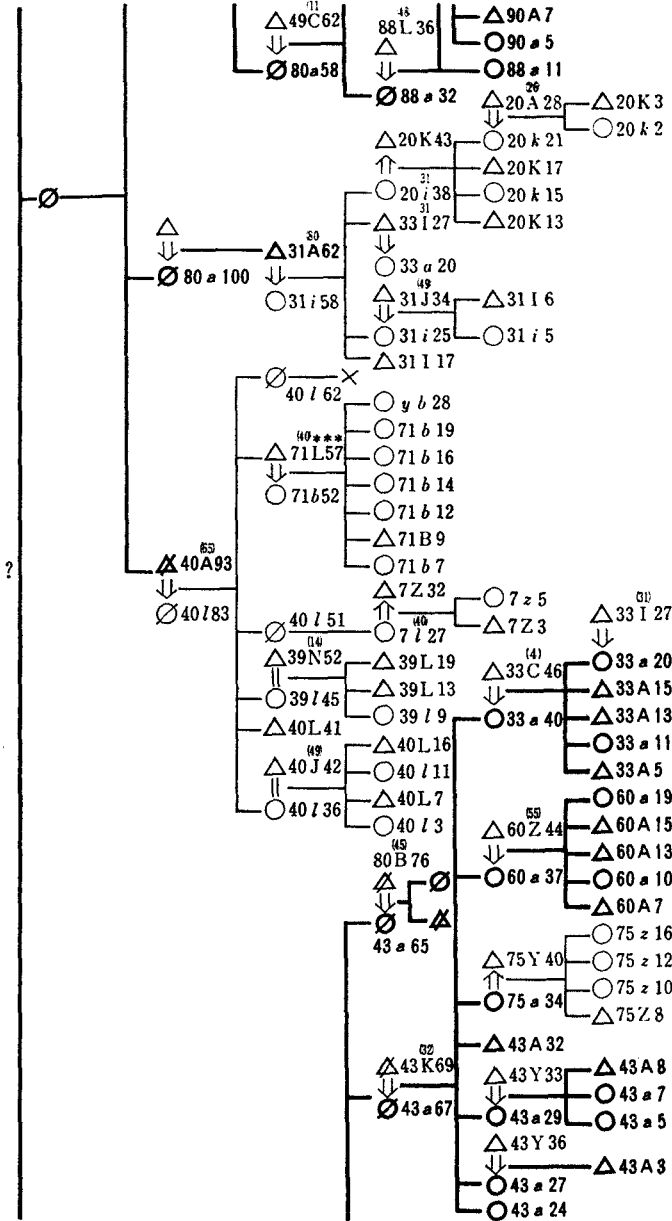
4

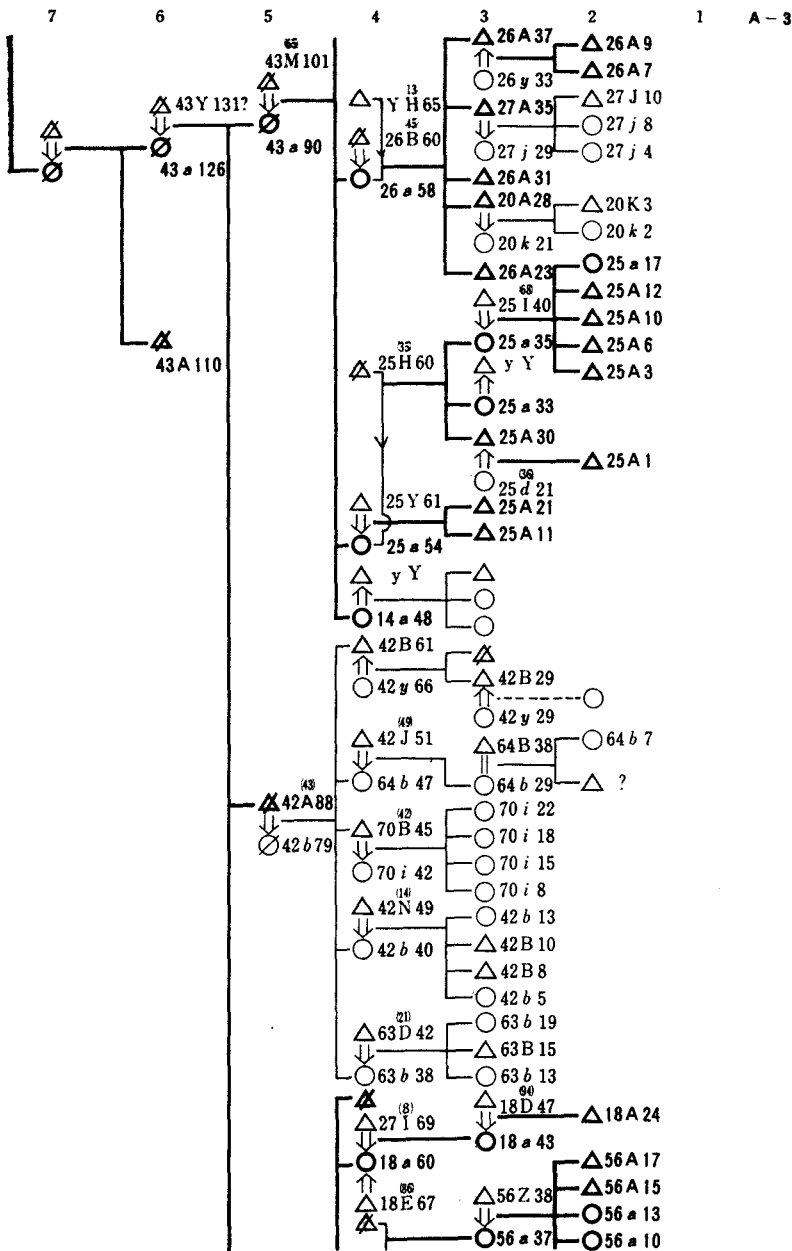
3

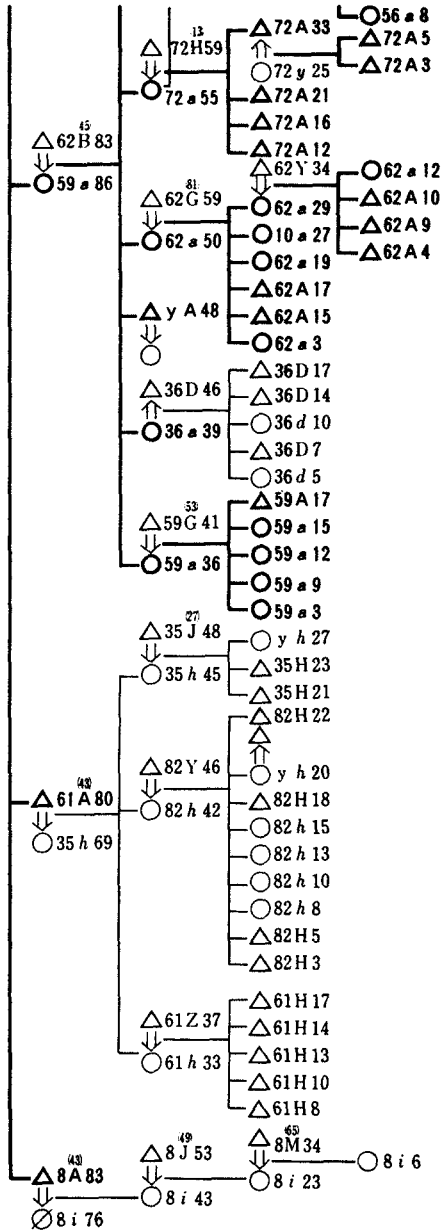
2

1

A-2







7

6

5

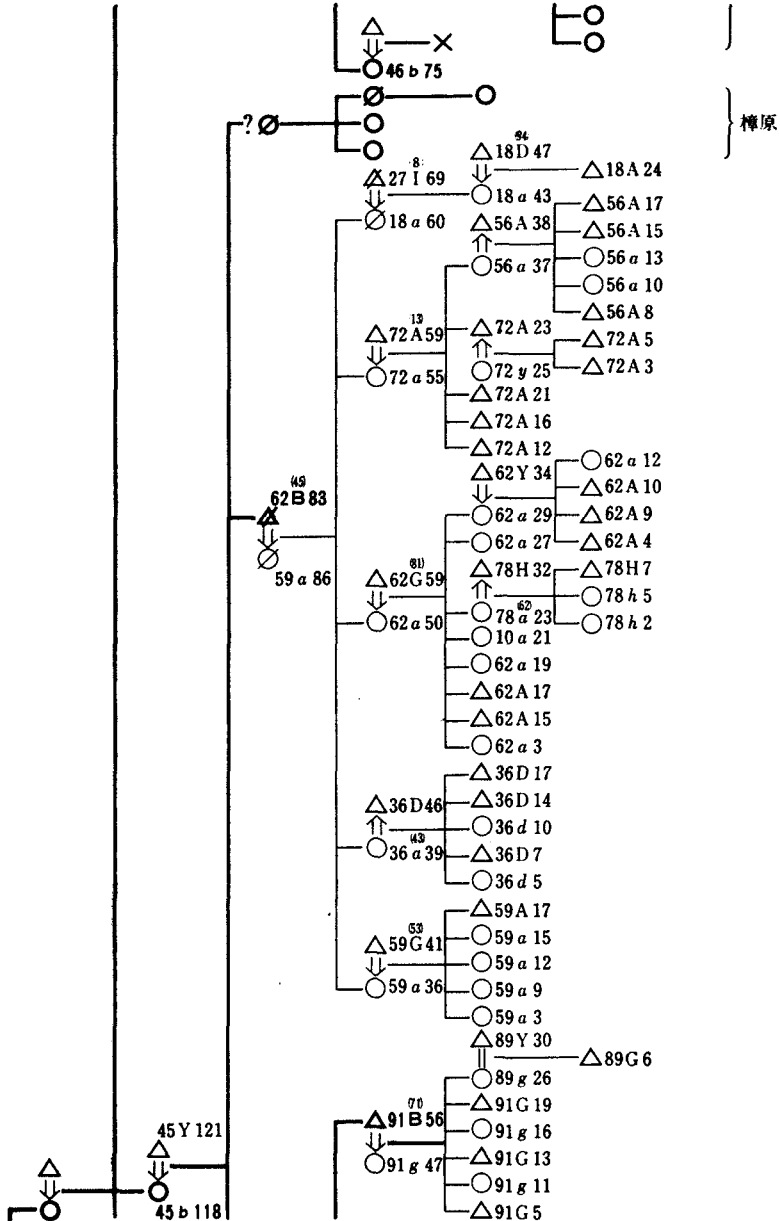
4

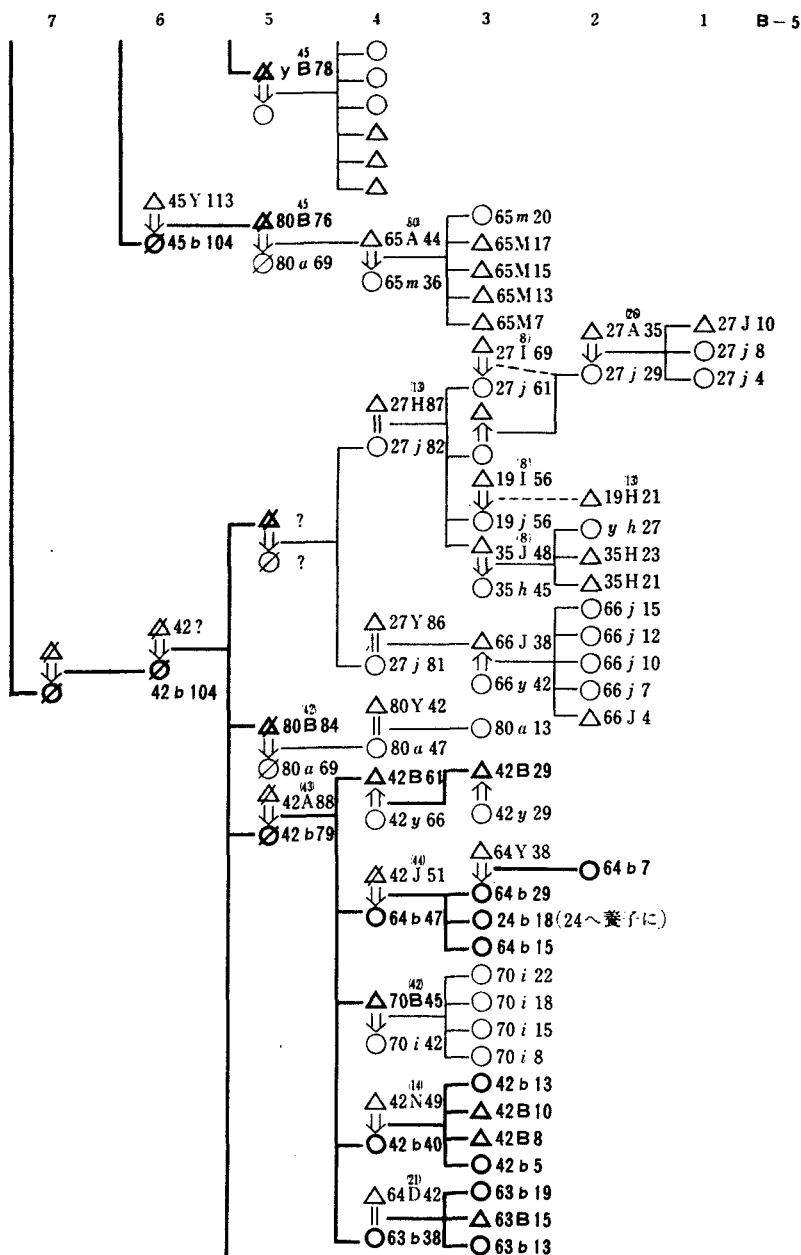
3

2

1

B-3





7

6

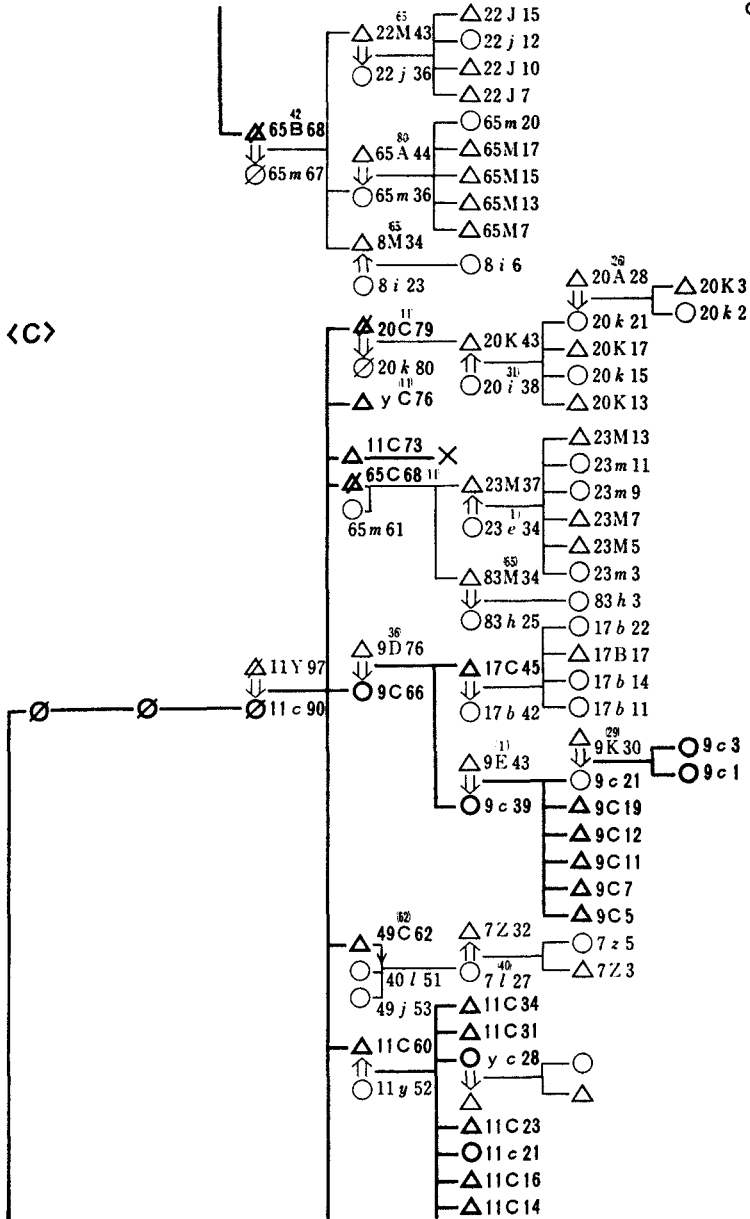
5

4

3

2

1

B-6
C-1

7

6

5

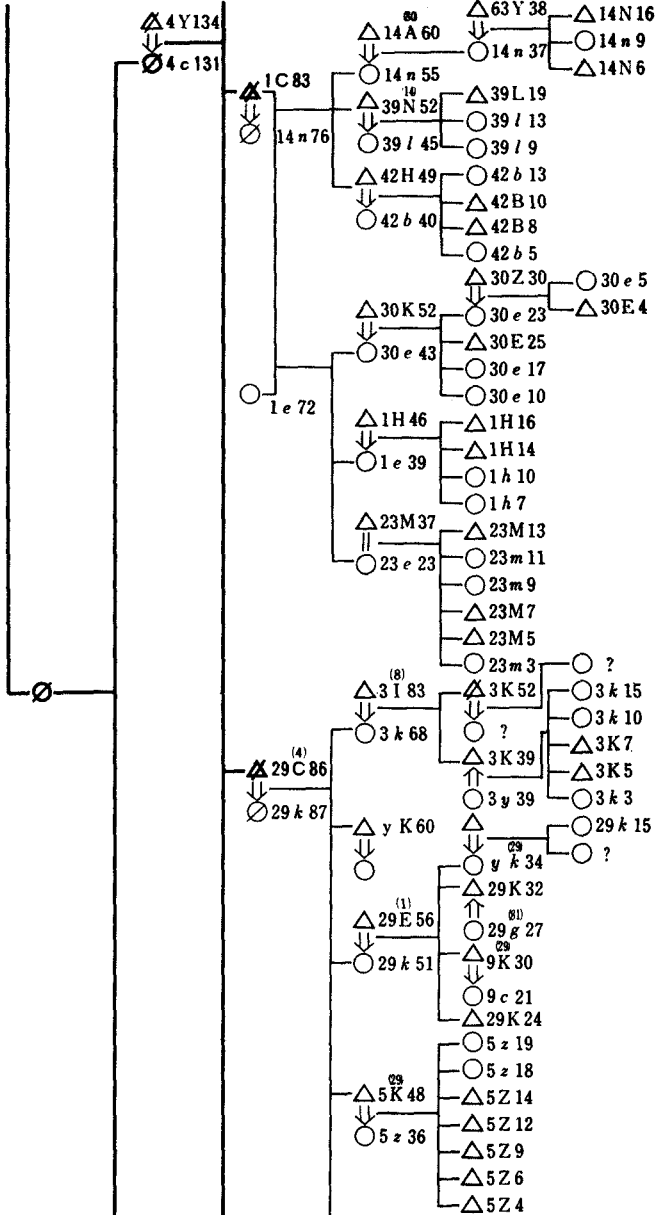
4

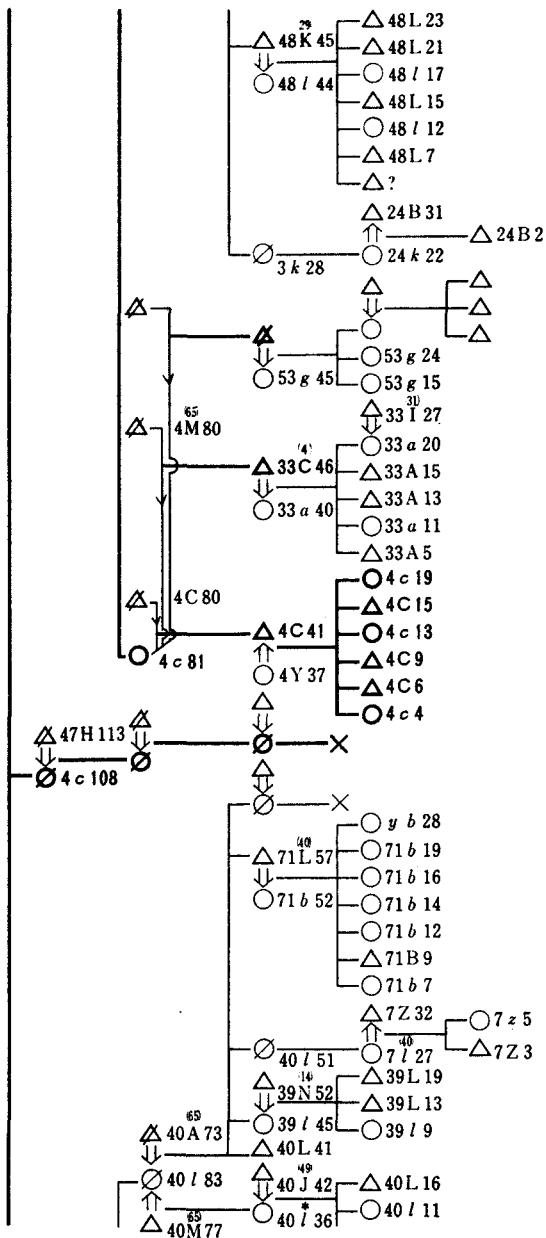
3

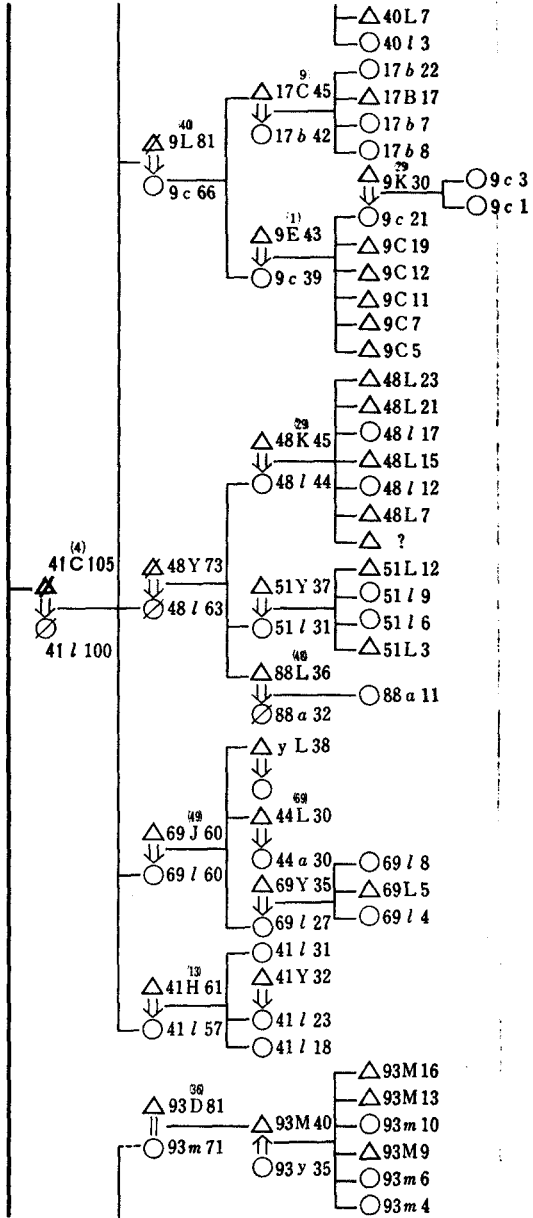
2

1

C-3







7

6

5

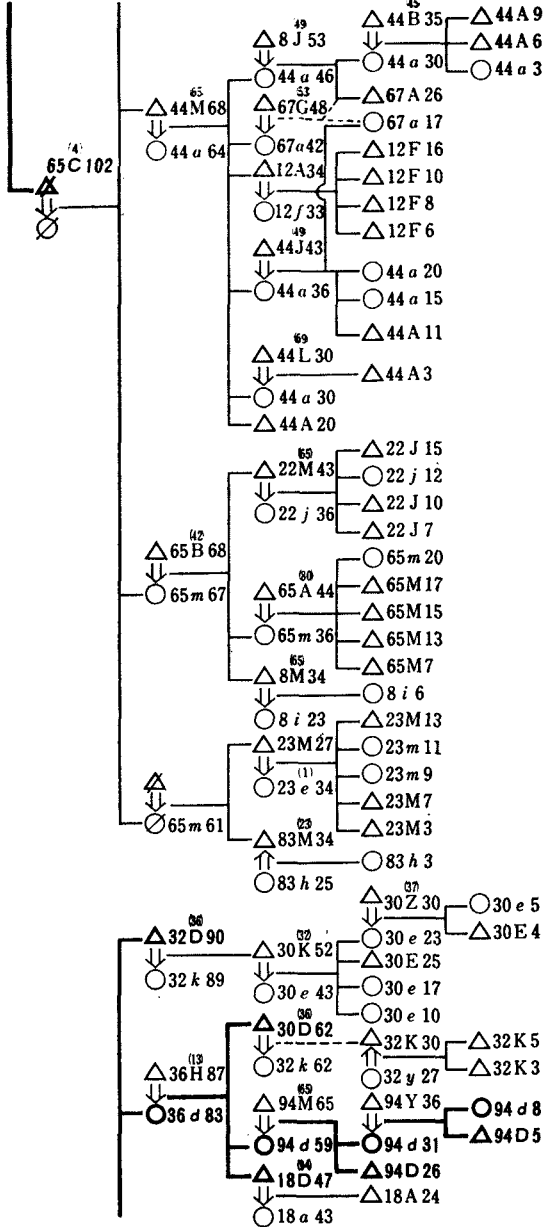
4

3

2

1

C-6
D-1



<D>

7

6

5

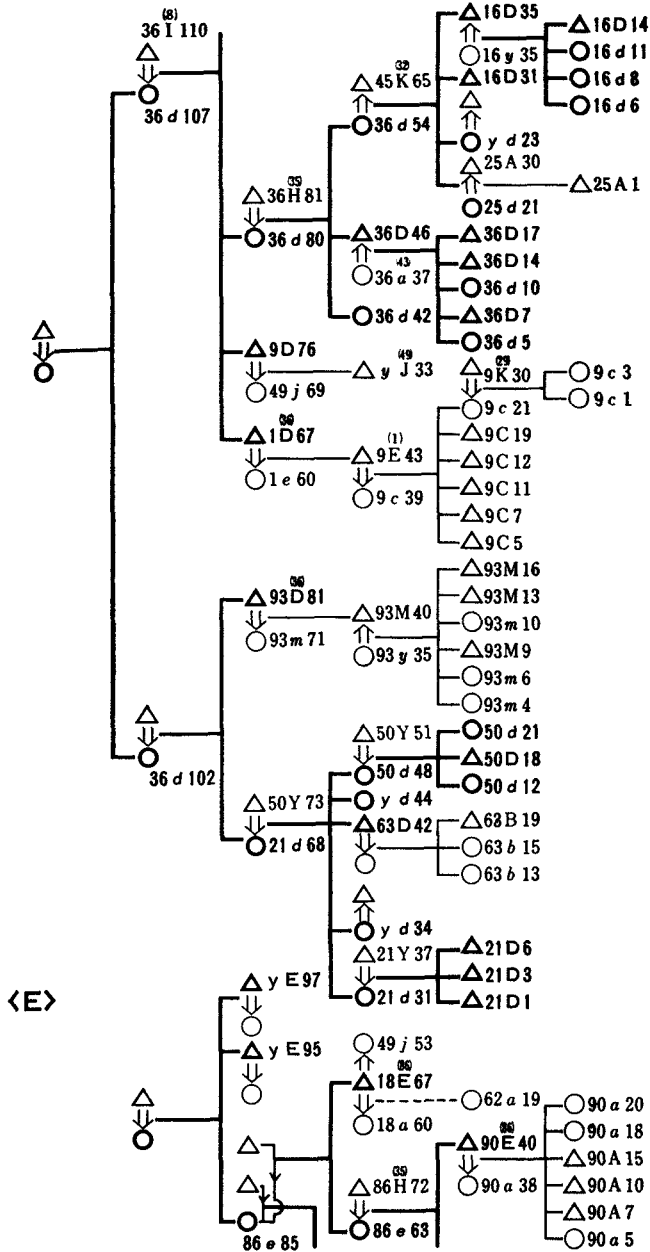
4

3

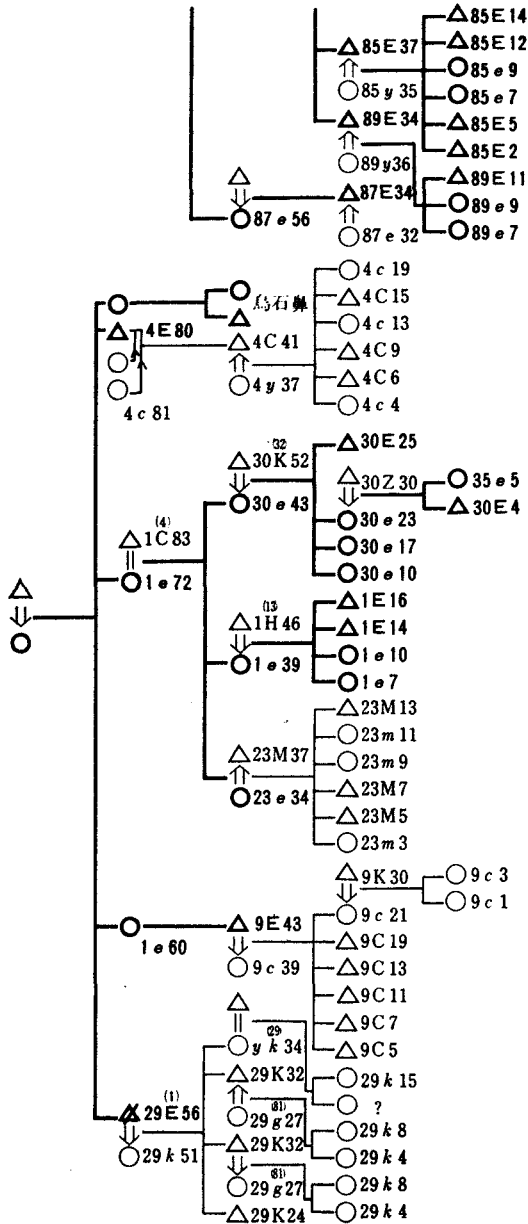
2

1

D-2
E-1



<E>



7

6

5

4

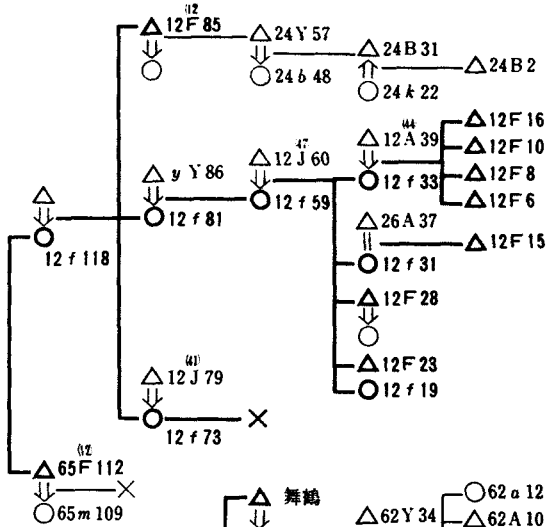
3

2

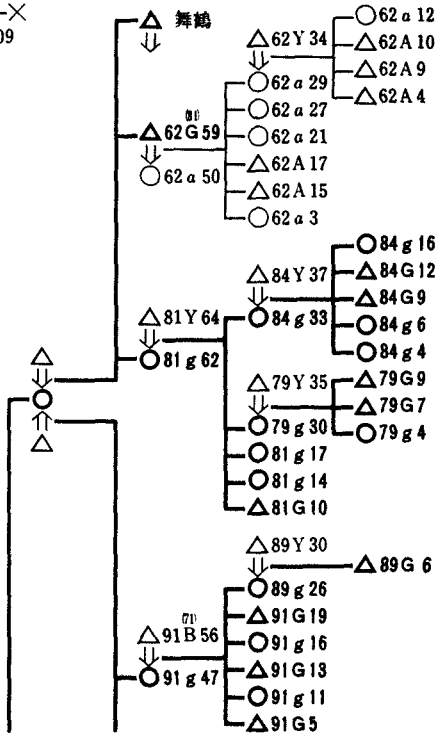
1

F-1
G-1

<F>



<G>



7

6

5

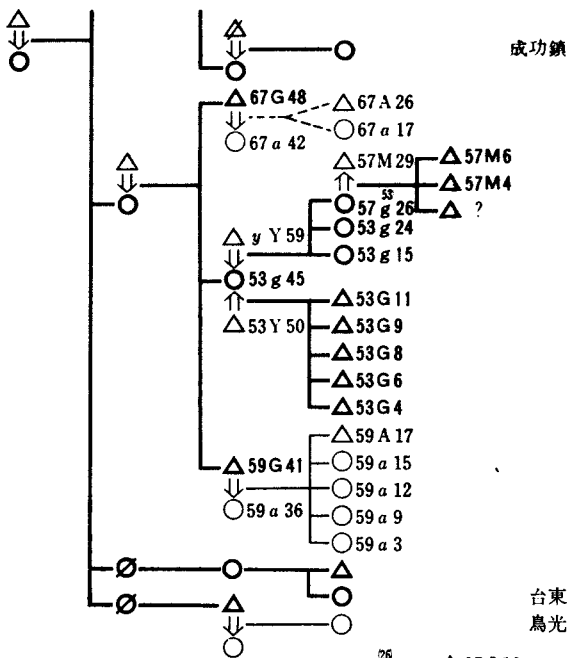
4

3

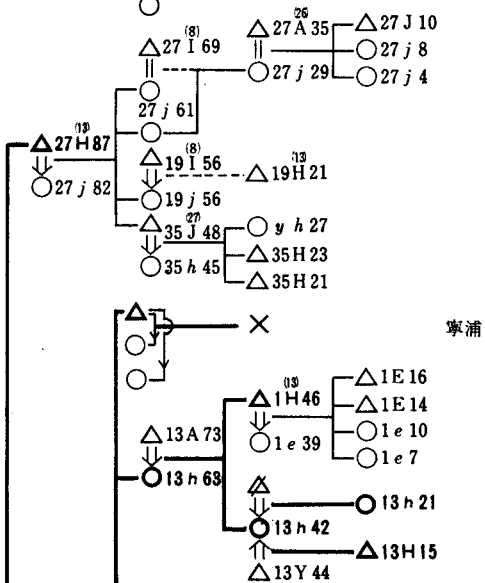
2

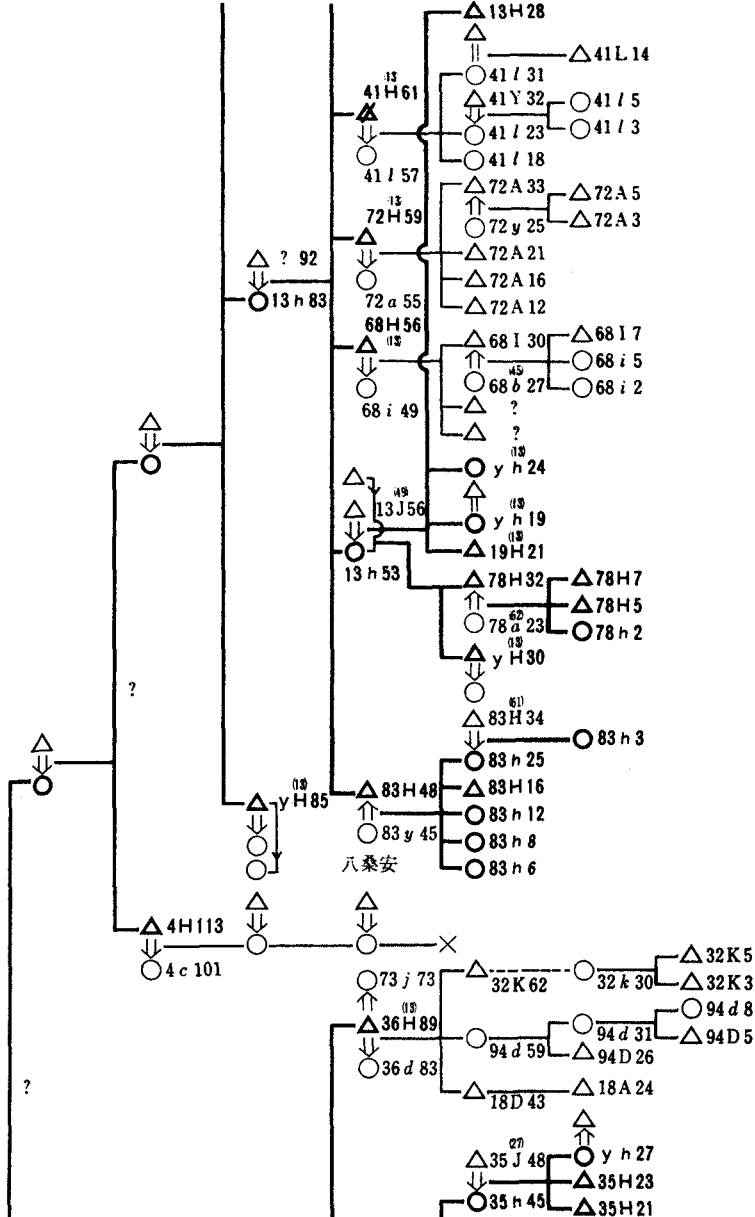
1

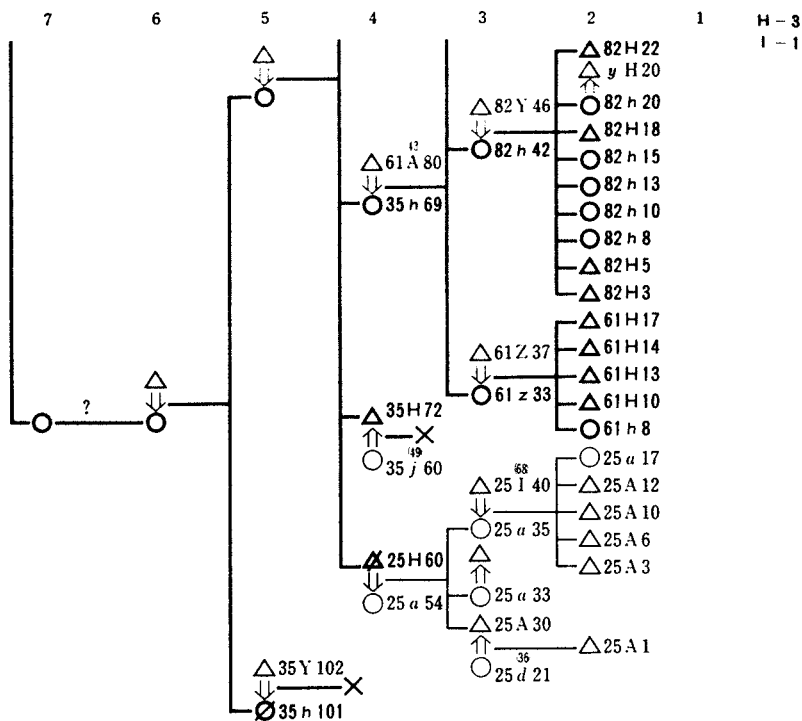
G-2
H-1



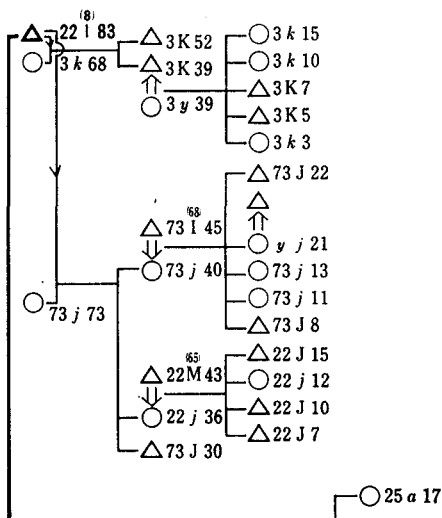
<H>

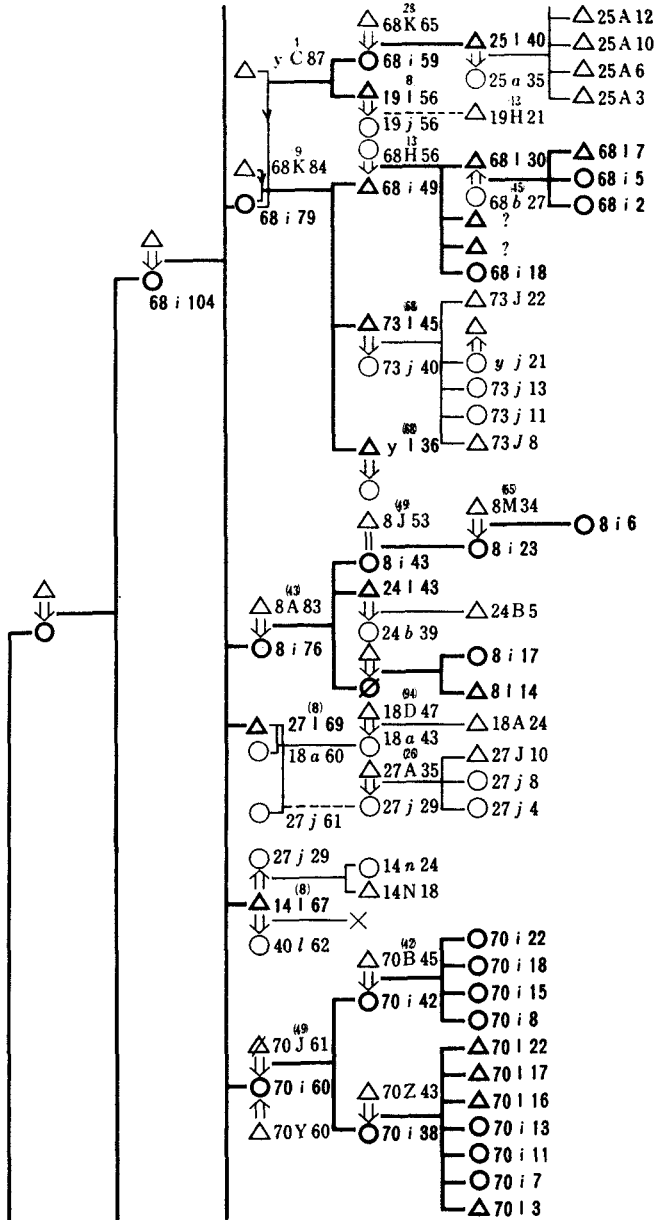


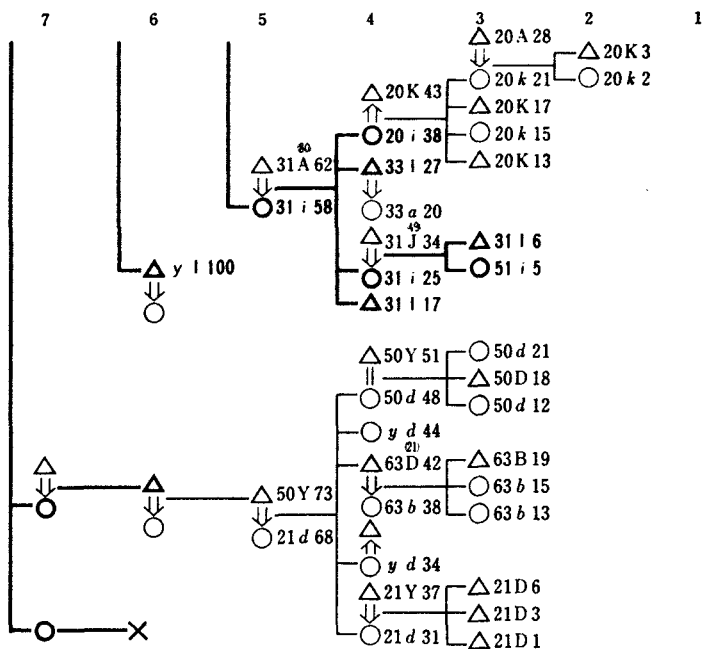




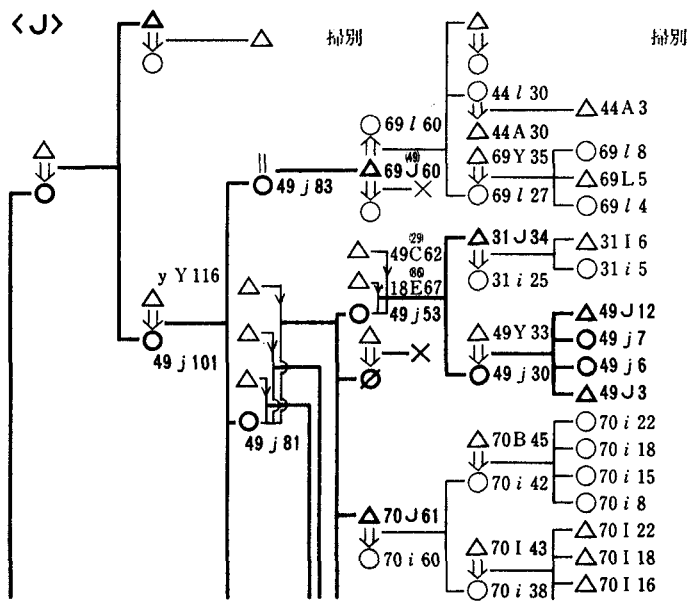
< I >







1
I-3
J-1



7

6

5

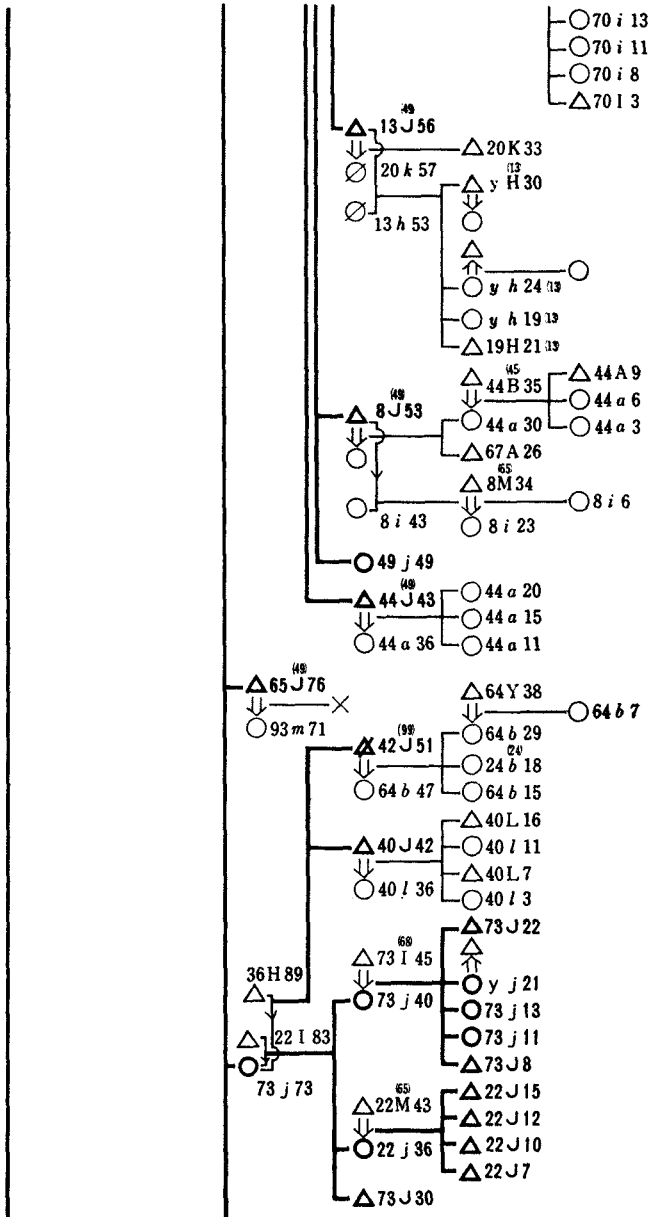
4

3

2

1

J-2



7

6

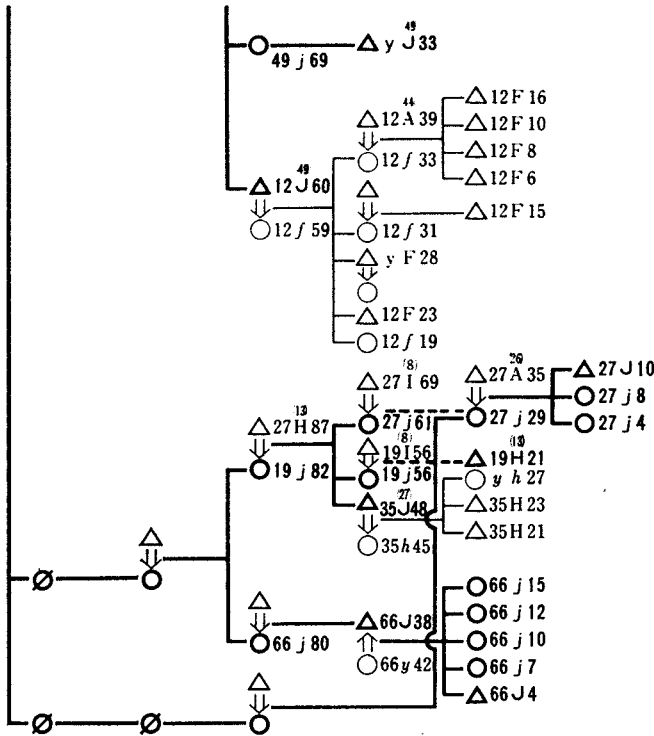
5

4

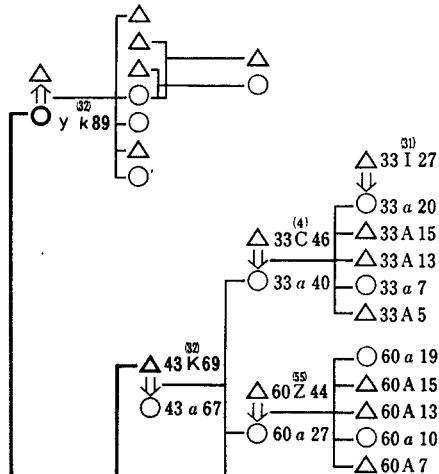
3

2

1

J-3
K-1

<K>



7

6

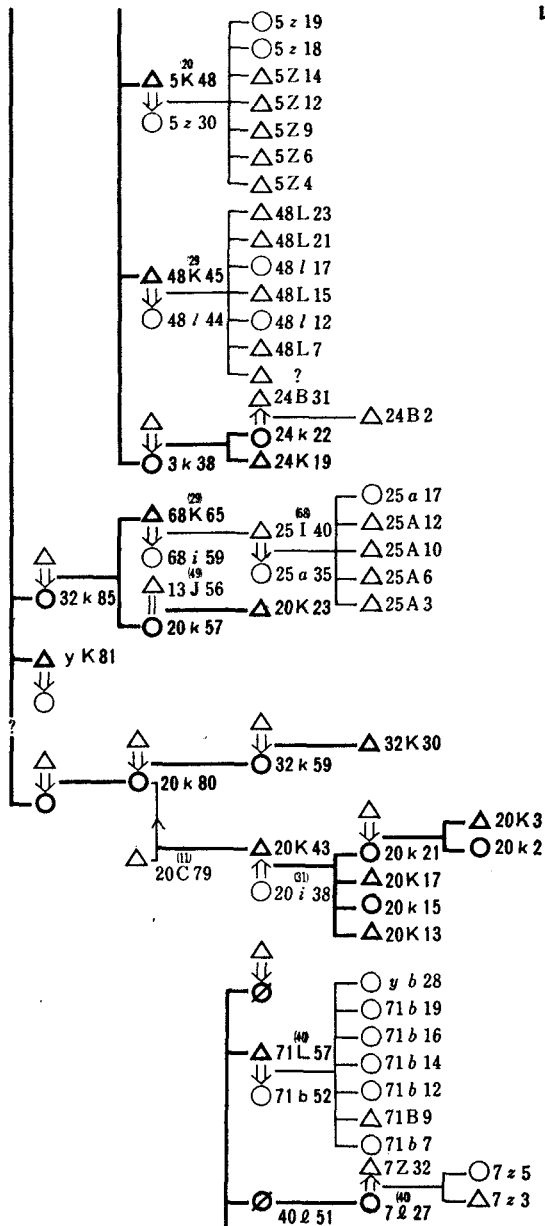
5

4

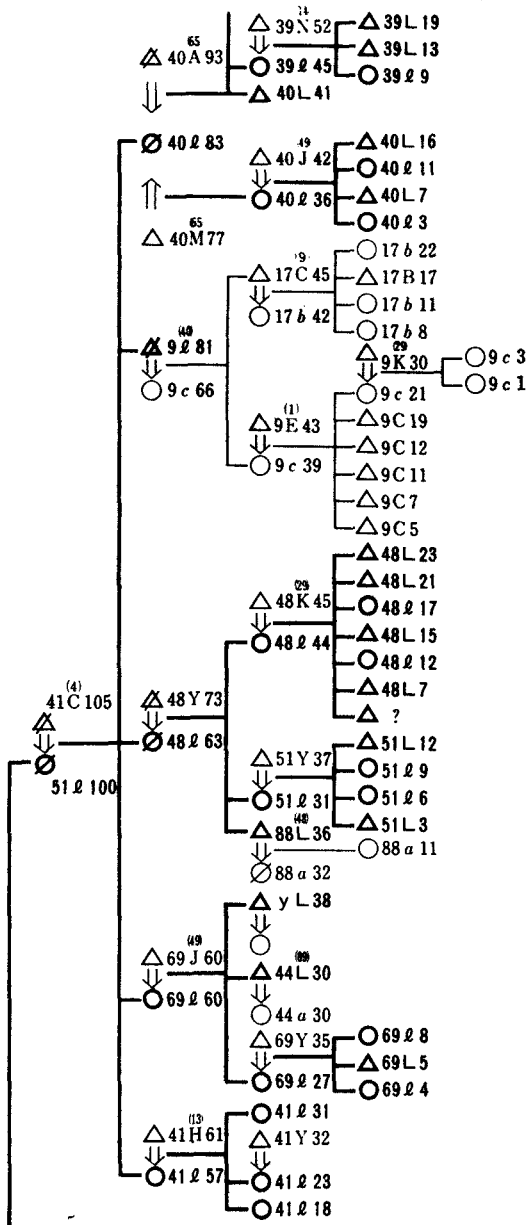
3

2

1

K-3
L-1

<L>



7

6

5

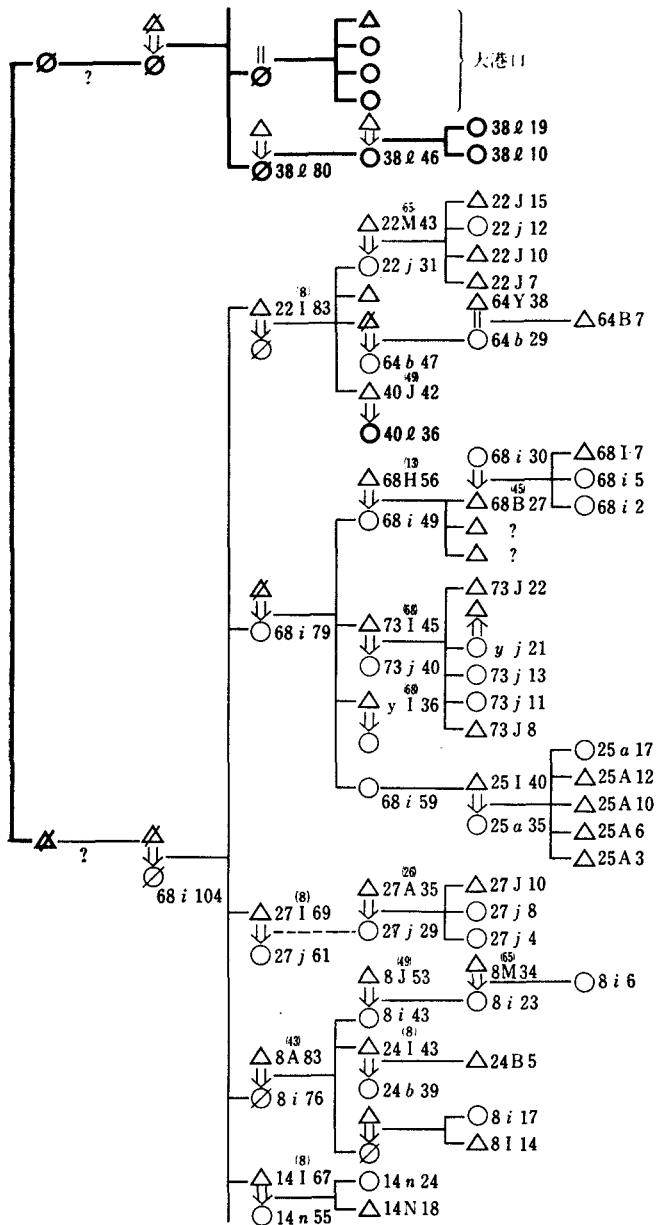
4

3

2

1

L-3



7

6

5

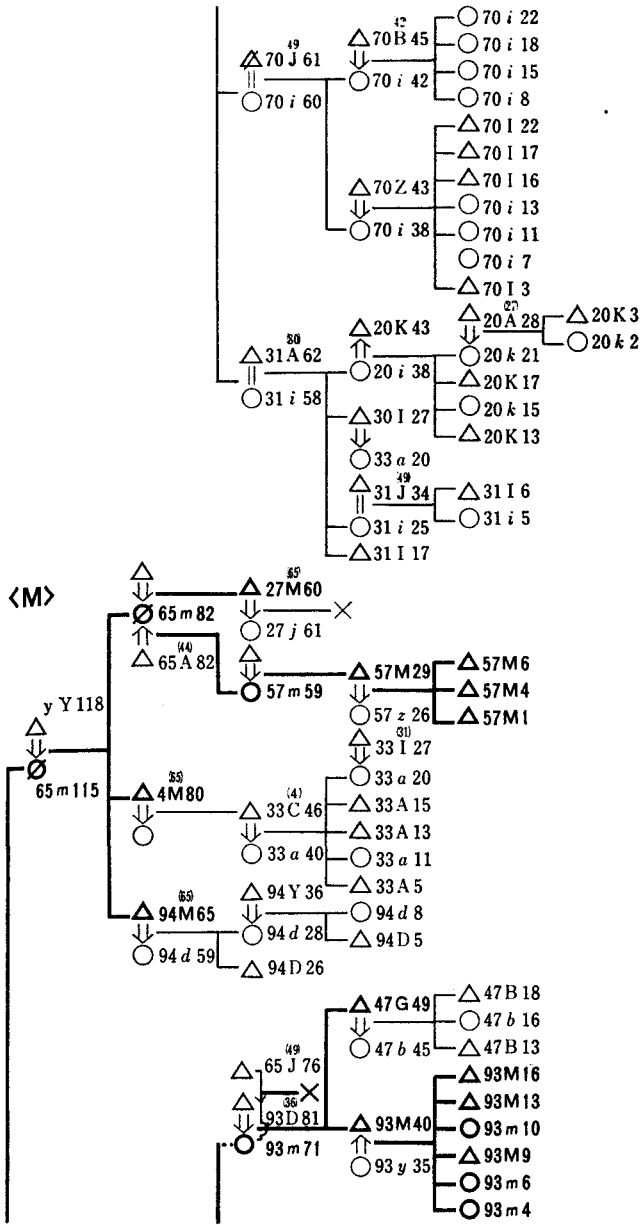
4

3

2

1

L-4
M-1



7

6

5

4

3

2

1

M-2

